
玄関あけたら二秒で異世界

殻史二五二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

玄関あけたら二秒で異世界

【Nコード】

N4763X

【作者名】

殻史二五二

【あらすじ】

志賀恭平は大学が夏休みに入り、明日から友人達とキャンプを予定していた。

その前夜、一人酒盛りをしながらテレビを見ていると妖しげな超能力の番組がやっていた。そこに出ていた超能力者の所為かは知らないが、翌朝起きてルンルン気分で玄関を開けてみると、そこには視界一杯に広がる大密林が広がっていたのだった。

異世界に飛ばされた部屋と借主の恭平が送る異世界ファンタジー。恭平は無事に元の世界へと帰還することができるのか？

それとも異世界に根を下ろす覚悟をするのか？

奇跡は、信じぬ者に降りかかる。

ビールの喉越しを楽しみながら、焼いたチヨリソーを摘み口へと放り込む。程よい辛味が舌を刺激して、この直後に飲むビールの旨みを引き上げる。

なんと、至高のひと時だろうか！と、男はテレビを見ながら小市民的な幸せを噛み締める。

夏は始まったばかりのムツとするような夜の蒸し暑さであったが、クーラーをガンガンにかけた室内であれば関係ない。

何となく流しているテレビの中では夏恒例の心霊、超能力特集などやっていた。

男 志賀恭平は幸せのど真ん中にいた。

大学も夏休みに入って三日目だ。やらなければいけない課題はあるものの、悪友が企画してくれた夏休み大人達のバーベキューキャンプ合コン』どきっ！ テントにお持ち帰りもあるよ！』計画を明日からに控えて、恭平はひとり童貞卒業前祝会を開催していた。

最初は明日に備えて早くに寝ようと思っていたのだが、子供時代に遠足の前夜は眠れないという性分は大人になっても直っていないらしい。一部、大人じゃない部分があるが……

「くぁー！ B女子大とコネがあるなんて、佐竹さんマジ神！」

既に五本目になるビールを開けながら、ビール缶を掲げる。

「ゴッド佐竹様にカンパァーイ！」

酔いもかなり回り、明日からの事を考えて否が応にもテンション

があがる。

調子に乗りすぎて余りの大声に隣家との壁が殴られてしまったが、これもご愛嬌だ。

ビールを飲みながらなんとなくテレビを見てみると、超能力検証なんて事が始まっていた。

テレビに映るイケメン外国人が通訳を通して超能力を披露している。恭平はそれらを鼻で晒いながら見ていた。

（超能力や幽霊なんて存在があるものなら是非とも見てみたいもんだ）

テレビの向こう側では場も盛り上がり、名も知らないアイドルやらモテることで有名な俳優などが感嘆の声をあげたりしている。

画面の向こうで驚いた表現がテレビに映るたびに、見ている恭平の気持ちは冷めていく。

そして、そろそろ超能力者様の出番が終わるを迎える頃になって、突然、超能力者がカメラ視線で手を向けながら何かを話し始めた。通訳を通して内容がテレビから流れる。

『これからテレビを見ている方の所へ電波を通じてパワーを送り、テレビの前の皆さんに奇跡をお見せします！』

その言葉を聞くなり、恭平は思わずふきだした。なんて、わかりやすいペテンだと……

エセ占い師やエセ超能力者が良く使う手である。あまりの使い古された手に、恭平の顔に苦笑すら浮かぶ。

何に対して奇跡を起すのか具体的には言わず、ただ漠然とした表現で身の回りで不可思議な現象を起すと言う。

恐らく単純な人間ならばいつ止まったかわからなかった時計の針やら、無くしたと思っていた物を見つけただけでも『超能力か!?!』

とでも思っただろう。

あまりの馬鹿馬鹿しさにビールを煽りながら、テレビを消そうとリモコンを手取る。

画面の向こうには額に汗を浮かべながら、迫真の演技をしている自称超能力者が映り、その下 画面の下部にピンクの帯が『何か起きた方は番組時間中にお電話でお知らせください。電話番号はこちら』などとスクロールが流れている。

超能力者の必死の形相に対して、下にピンク色の帯がミスマッチで違和感を感じるしかない。

「必死だなあ！ がんばれ超能力者！ 負けるな超能力者！ 家では女房子供が泣いてるぞっと……」

リモコンをテレビに向けた瞬間、一瞬だけ眩暈のように視界がグラツと傾いた気がする。

その時にはすでにテレビは消えて部屋は静けさを取り戻していた。

「やべ……飲み過ぎたかな？ まあ、明日はタナベツチの車に乗せてもらう予定だし、タナベツチには悪いけど車で寝かせて貰おう」

酔いが過ぎたのか妙に重くなった体を引き摺ってベッドに横になると、すぐにハイビキをかいて眠り始めた。

恭平は気付かなかった。テレビが消える寸前、画面が砂嵐になっていた事に……

適温に保たれた室内でけたたましい音を鳴らす目覚ましに眠りの底から引きあげられた。

古いタイプの目覚ましはベルを叩き、金切り声を上げて主を起そうとする。

それに答えたのは持ち主である恭平の無遠慮な掌だった。

恭平は手を叩き付けるように目覚ましを掴むと、いまだ睡魔を引き摺る頭で時計裏のスイッチを切る。

いつもなら二度寝へと突入するところだが、恭平にとって今日は特別な日だ。

眉を顰めながら勢い良く上半身を持ち上げて、ベッドの上に座ると寝癖の付いた頭をボリボリと掻き毟る。

今日は流石に遅刻やドタキャンなど出来るはずもないし、死んでもするつもりはない。

酔いはかなり醒めているはずだが、どうにも頭の芯が痺れたように意識が混濁しているような気がする。

大きく一つ欠伸をすると、散らかっているビール缶やビール瓶を踏まないように気を付けながらダイニングキッチンに扉のある風呂場に入る。

この家で唯一自慢のトイレと別になっている風呂場の中は、学生マンションにしてはかなり広めに作られ、風呂好きな恭平はこの風呂場が気に入って、マンションをここにきめたぐらいである。

流石にこの後、予定の詰まっている状態では悠長に風呂に浸かるなんて事ができないが、シャワーを浴びる時間ぐらいならあった。

かなり、温めのシャワーで全身を洗い流すと髪を洗い、バスタオル一丁だけ腰に巻いて冷蔵庫から、飲み物を取り出した。

優雅に朝風呂、朝酒としゃれ込みたい気持ちを抑えて、作り置いておいた麦茶をコップに濯ぎ、冷たいお茶を乾いた喉へと流し込んだ。

食道を通って、胃に流し込まれる冷たい感触に漸く意識がすつきりとするような気がする。

「あーっと、迎えにくるのが十一時ぐらいだから、後一時間か？

まあ、のんびり準備しても大丈夫か。必要な荷物は玄関にまとめて

あるし……」

バスタオルで頭をガシガシ拭きながら横目に玄関を捉えると、そこには牛のブロック肉が入ったクーラーボックスと着替えやら水着といったこまごましたものを入れた登山用の大型リュックが、存在感を主張しながら玄関脇に鎮座していた。

二杯目の麦茶を注いで手に持って、生活の大半を過ごす自室へと帰るとテーブルにコップを置いて、リモコンへと手を伸ばす。

電源スイッチを押して、リモコンをクッションの上へ放り投げてから、パンツを履く。

だが、パンツは腰へと収まらず足の途中で止まる羽目になった。
なぜなら……

「はあ？　なんでテレビ映んねーんだ？　故障か？　けど、昨日寝る前はちゃんと映ってたよなあ」

その視線の先には不快な音を奏でるテレビモニターがあった。画面には何も映ってはおらず、目がチラつく砂嵐だけが映されたいた。パンツを履いて、リモコンを拾いあげるとパチパチと放送局を変ええる。

しかし、どの局も何も移らず、チャンネルをいくら変えようとも画面には無機質な砂嵐しか映らない。

恭平はテレビのアンテナ配線を確認したり、テレビを叩いたりするが一向に直る気配すらなかった。

（勘弁してくれよ……。出かける時に管理人に声掛けて、アンテナに異常が無かったらテレビどうしよ）

どうにもならないテレビの電源を落とすと出かける用のTシャツ

にハーフパンツというラフな格好に着替えて、ベッドの上に置いて充電しておいた携帯電話を見る。

「あれ？　なんで？」

携帯の時計は十時半を示していたが、恭平が素っ頓狂な声をあげたのは、そこではなく携帯の電波強度を示す表示を見てだ。

普段は二本から悪くても一本はほぼ立っている筈の表示は無情にも圏外を示していた。

一度電源を落として、再起動してみるも圏外のまま変わらない。

(なんだよ……。料金はちゃんと払ってあんだろ！)

もしかしてと思い慌ててノートパソコンを起動してみると、どうやらパソコンは通じているようだ。

携帯会社のHPを急いで検索して、何かお知らせ来ていないか？メンテナンス情報なども見てみるも、それらしい記述はどこにも見当たらない。

「マジかよ！　佐竹と連絡取れないじゃん！　勘弁してくれよお。マジで！」

愚痴を言っていた所で携帯電話が直るわけでもテレビが直るわけでもない。

恭平は深く溜息をついて携帯電話をポケットに入れる。

一縷の直る事を祈りつつ、もし駄目だったら契約した店舗に途中寄ってもらい、代替機を借りようと思いなおす。

「テレビは壊れるわ。携帯は壊れるわ。マジついてねえ……。幸先悪いなあ」

本来、楽しいはずの女の子を交えてのバーベキューの日だというのに朝からこれでは気分が乗らなくなるのも頷けるものである。

気分転換も兼ねて、もう外で待とうと考えて玄関へと向かう。靴を履いてリュックを背負いクーラーボックスを肩に掛けると玄関の扉に手を掛けた。

管理人になんと言って行こうか考えながら押し開いた。その扉の向こうには……

「……………は？」

ジャングルのような高い木々が密集した。まさに密林と呼ばれるものが目の前に広がっていたのだった。

禍福は糾えるザイルの如し

恭平が密林に飛ばされて一週間が経とうとしていた。

その間に何かしていたと言う訳ではないが、ただ、恭平が現実を受け入れられるようになるまで長らく時間が掛かったただけだ。

一週間でした事といえば積みゲーが一本消化されたぐらいか。

この文明とは程遠い密林でゲームが出来るのである。

ここが現実であると気付いてまず初めに疑問に思ったことは、電気が通っている事だった。

電気だけではない。ガス水道に至るまで飛ばされる前となんら変わることなく使うことが出来た。

そこで色々と実証する事にしたのだ。

そうして、一週間の成果としていくつかわかった事があった。

一つ目はテレビ、携帯はどこにも繋がらない。これは予想していたのでなんら問題はない。

恭平が驚き我が目を疑ったのがパソコンと食料の問題だった。

色々、調べている時にふと朝パソコンが繋がっていた事を思い出したのだ。嬉しい事にそれは錯覚でも思い違いでもなかった。

パソコンを起動すると回線接続のランプが点灯していた。

しかし、喜ばしく無い事もあった。メールはおるか掲示板の書き込みも含めてこちらからのアクションをまったく反映しなかった。

検索はできるのだ。だが、いざ書き込みやメールを送信するとエラーが表示されてどうにもならない。

最後に食料だが、これも異常としか言い様がなかった。

使用したはずの食材が元に戻っていたのである。

恭平は気のせいかとも思ったが、使ったはずの卵が……ベーコン

が記憶にある使う前と変わらず存在していた。

何よりも決定付けたのは消費期限が近かった為に飲み切ったはずの牛乳が元に戻っていた事である。

こればかりは、恭平も自身の正気を疑ったほどだった。

恭平は試しに卵をきちんと数え、それを紙に書いた上で冷蔵庫に貼り付ける程に念を入れて、ゆで卵にして食べてみた。

果たして冷蔵庫を開けてみればそこには紙に書かれた数と同じ数の卵が整然と並んでいたのだ。そこで、恭平は仮説を立てた。

この部屋という空間にあった物質は消費しても減らないのではないか？　なんていうトンデモ理論な仮説ではあったが、それ以外に考えられなかったからだ。

恭平としては何故こんな事が起こっているのかはわからないが、食料の心配をしないで済むのは正直ありがたかった。

外に出れば食べられる物もあるだろうが、何が潜んでいるかわからない密林を出歩かねばならないのは勘弁してもらいたい所だからだ。

「ごちそうさまでしたと……」

やや遅めの朝食を取るとシンクに食器を漬けて玄関へと向かう。

玄関では登山用のリュックにザイルやピッケルといった登山にも登るのかのような荷物が置かれていた。

恭平はリュックを背負ってザイルを手にするとザイルの端をベランダの手すりに結び、部屋を通して玄関へと戻る。

「無いとは言えんからなあ。部屋が元の場所に戻る時に外に居ましたじゃ目も当てられねえ」

独り事を呟きながらザイルを腰に巻きつけて、ピッケルを手にする。

万が一に部屋がどういう方法かわからないが、移動した場合ザイルで繋がってさえいれば、置いていかれる事がないだろうと考えていたからだ。

「今日の探索は玄関から十メートル以内！ 志賀隊員行ってきます！」

開けた玄関からザイルを地面へと下ろして、おどけるように部屋に向けて敬礼をする。

気分はまるでどこぞの秘境やUMAなどを探す探検隊気分だ。だが、あながちに冗談だけでは無い。こうでもして自分を奮い立たせないといんな未開の地に踏み出す勇氣など湧いてこないからだ。

昨日、家から出た時には玄関扉を握ったまま、外を見回しただけに留まった。現実だという事を実感するためである。

玄関から一步出たとき、むせ返る青臭さとじつとりと絡みつく湿度が否が応にも現実だということをやまざまざと思ひ知らされ、すぐに部屋の中に逃げ込んだものだ。

不思議と外の臭いや湿度、音までも部屋の中には入ってこなかった。

今日は昨日に湧いた疑問といくつかの実験の為に外へとでたのだが……

相変わらずの臭いと湿度に早くも部屋に帰りたくなってくる。

「はあ、なんでこんなことになっちまったんだらうなあ……」

愚痴を零しながら、玄関から一メートルほど離れると落ちていた木の枝を拾う。

そして、振り返ると家に向かって力いっぱい投げつけた。

木の枝は開いたままになっている玄関へと吸い込まれると思いきや……

部屋に入る寸前、見えない壁にぶつかつたように跳ね返されて、地面へと落下した。

恭介はそれを見て、一瞬だけ驚いたように目を見開くと、足元に落ちている小枝や石ころを次々と投げつける。

しかし、そのどれもが最初に投げた枝と同じく跳ね返されて地面へと落下する。

最後にポケットからスプーンを取り出すと玄関へと投げる。

スプーンはさっきまでの木石のように跳ね返される事も無く部屋の中　ダイニングキッチンの床にバウンドして視界から見えなくなつた。

(やっぱり見えない力か何かがある部屋という空間を隔絶してるのか……?)

次に玄関から右回りに家の壁沿いに歩く。ザイルの長さには限りはあるが玄関を中心に左右に半周ずつ回ればそれでいい。

右回りで家を回り、玄関から反対までくると下来た通りに戻って、今度は左回りで家を半周する。

これまた想像していたとはいえ、家の壁はまるで陶磁器の壁のように白く艶やかな色彩を放っており、その壁には外からの配線や上下水管の通っている様子もない。

濃い緑の密林にポツンと白い箱が立っているような異様な光景だった。

(くそ……！　なんだこれ!?)

少しは慣れたと言えど、ここまで異常な光景を見せつけられると暑さや湿気とは違う汗が手の平を湿らせる。

恭平は表向きは冷静を保っているが内心では、パニック一歩寸前だった。

普通の人なら既にパニックを起しているだろう。恭平が冷静でいられるのは趣味の登山で培った経験と食料が無限だという安心感からだ。

最後にリュックを背中から下ろすと、木の枝や小石、果ては落ち葉まで中に入れると背負い直した。

（落ち着け……落ち着け。今すべき事だけを考える！ 情報の収集と解析、それと推測を埋めるんだ）

二度三度と深呼吸すると、気合を入れなおして周りと比較して茂みや木が密集していない方向へ進み始めた。

外で行う最後の実験は密林の木の種類を見て、植物を採取して持ち帰る事だ。

恭平は趣味の登山で野草には詳しい方だと思うが、それでもアマゾンなどの動植物はまったく知らない。だが、そこはパソコンという文明の利器が役に立つ。

特徴から検索して、大体の群生域などを調べれば、どここの大陸かぐらいならばわかると考えていたからだ。

だが、その希望は予想外な事で裏切られる事になる。

家から七メートルほど離れたとき、腰に巻いたザイルが軽く引っ張られた気がして振り返った。

恭平が振り返った視線の先には何もなかった。そう、“何もなかったのである”

一瞬前まであったはずの家が……恭平が唯一心の拠り所にしてきた自宅が……音も無く。まるで最初から存在していなかったように姿を消していたのだ。

あつたのは結ばれた先を失ったザイルと、その切れた端が死んだ蛇の如く地面に横たわっているだけ……

「う……う、そ……え？ え！ ええ！？」

足から力が抜けて、その場にへたり込みそうになるが這うように家があつた場所へと向かう。

そこにはもちろん家などはなく。家があつた痕跡すら残されていなかった。残されていた物は玄関の見えない壁に弾かれた物が散乱しているだけ……

家があつた場所に立って見るも何も起きない。

恭平は今度こそ、その場にへたり込むと目から涙が零れ落ちる。

「……くっそ……くっそ！ 予想してたじゃねーか！ 馬鹿か俺……。くっそ……」

地面に垂れ下がるザイルの端を摘み上げて見つめる。そこには頑丈なはずのザイルが綺麗な断面を見せて途切れていた。恭平はザイルを地面へと投げ捨てて、顔を地面に伏せて、子供のように大声で泣き始めた。

その姿からは本来の冷静さなどは微塵も感じられない。

唯一の生命線と帰還への希望が目の前で消え去ってしまったのだ。残された物はリュックとピッケル、そして、中途半端な長さのザイルだけである。

こんな装備で猛獣が恐らく潜んでいるだろう密林を抜けることは到底不可能だ。

「う……ああ……ちくしょ……くっそう……何もこのタイミングで戻らなくてもいいじゃねえか……くっそ……ああああ……っ！」

怨嗟の言葉を涙混じりに放ちひたすら泣き続ける。

どれほどそうして泣いていただろうか。泣き疲れて泣き言さえ漏らす氣力を失った時にそれは聞こえた。

茂みが鳴る音と同時に聞こえてきた獣の唸り声……

喉の奥を低く鳴らすように聞こえてきた声に身を固くしながら、ゆっくりとそちらへと視線を向ける。

そこには病気で毛が抜けたハイエナのような頭を持ち二足歩行する化け物が居た。

身長一メートルほどの醜悪な化け物はボロ布だけを身に纏い、口から白い泡みtainな涎を垂らしながら、恭平を見つめている。

「ひいつ！……なんだよ！ こいつ！？」

どう見ても地球上には存在していないと思われる化け物に、小さく悲鳴を上げると地面に尻餅をついて後ずさる。

そんな恭平の姿を見て化け物は舌なめずりしながら、ゆっくりと恭平との距離を詰めてゆく。

恭平は必死に後ろへと下がろうと手足を動かすが、腰が抜けた状態では思つように動けず、精々数センチ後ろへと下がるのが精一杯だ。

「あつ……あ……ああつ！」

恭平を更に絶望させる光景が広がってゆく。

化け物の後ろ　茂みの中から一匹二匹と姿を見せ始め、遂には五匹の化け物が現れたからだ。

涎を垂らす口を見ると鋭い牙が整然とならんでいるのが見えた。

思わず、その牙で引き裂かれる自分を想像して、恭平は顔を蒼白にさせる。

化け物との距離はもう既に五メートルを切っている。見た目と同

様に動物並みの身体能力があれば一足飛びに飛びかかれてもおかしくない。

(やられる……くっそ……痛そうだな食われるのは……ああ、家にさえ籠っていれば……)

心には諦観が押し寄せ、後悔だけが頭を支配する。

「はは……家がなければこんな目に合わなかったのにな……」

その時

信じられない光景だった。視界が光に覆われると今にも襲い掛からんとしていた化け物が密林の中へと弾き飛ばされ、目の前には消えたはずの家と、その玄関が現れていたからだ。

啞然とするのも束の間で地面に四つん這いに、ほうほうの体で玄関へと転がり込む。

肩で息をしながら玄関に座り込み茫然自失で玄関の外を見つめると、そこには突然現れた家に様子を見ながらビクビクとろろつく化け物がいた。

その姿を見ると頭がパニックになり、恭平はバタバタと後ろへと下がる。化け物はきよきよと見回していたが、ダイニングキッチンで後ずさっている恭平の姿を見つけたり、口をあけて何かを叫びながら玄関へと駆け寄ってきた。

しかし、化け物は例の見えない壁によって防がれて中には入っては来れなかった。

必死に何も無い空間を引つ掻きで悔しげに顔を歪ませている。

その姿に、恭平は我に帰るとそおっと玄関へと近付いてゆく。

「やっぱ入ってこれないのか……よかったぁ……マジで死ぬかと思

った……」

恭平は魂から搾り出すように息を吐くと、ドアに付いている開閉バネのロックを外すと自動的にドアが閉まってゆく。それに伴って視界からは化け物の姿が隠れた。

いくら入って来れないといっても、流石にあの光景を見続けるのは心臓に悪いと言うものだ。

懐かしくも感じるダイニングキッチンの床に大の字で寝っ転がる。背負ったままのリュックが、恭平と床で挟まれて適度な痛みが背中走る。だが、その痛みにあるという事が夢で無いことを示しているようで逆に心地よかった。

「危険は覚悟してたけど……外はもういい……こりこり……」

それだけを呟くと極度の緊張から解き放たれた恭平は意識を手放したのだった。

出会いは雨と共に……

薄暗い森の中でシトシトと雨が降り注いでいる。

しかし、この雨はただの雨では無い。【瘴雨】と呼ばれている雨だった。【瘴雨】とは本来は透明なはずの雨粒が黄色で、その雨に長く当たっていると正常なモノも魔物に変異してしまうという恐ろしいものだ。

その発生原因は不明で一説では、魔王がいた時代の呪いだとか言われているが定かにはなっていない。

その【瘴雨】のせいで森の中は微かだが黄色く煙っている。そんな中を歩くフード姿の者達が居た。

一人はフードの端から剣を覗かせて、立ち居振る舞いから明らかに剣士とわかる。その剣士は周囲を油断無く警戒しながら進んでいた。その後ろを小柄な人がフードを同じように被っている子供を抱き締めて、剣士から決して離れないようにについてゆく。

三人は昨日から振り出した【瘴雨】に疲れ果てた様子で足取り重く慣れない森を歩き続けていた。

突然、剣士が藪から飛び出してきた大きな蜘蛛を剣を一閃して切り払う。

「まさか、瘴雨まで降るとは……これでは魔除けの臭い袋も役に立たないな」

戦闘を歩く剣士が苦々しげに黄色い水溜りに落ちた蜘蛛の死骸へと愚痴を吐く。その言葉に後ろを歩いていた人物が肩を一瞬ビクッとさせると申し訳なさそうに口を開いた。

「申し訳ありません……私達なんかのために……」
「い……いやっ！ ソフィア殿に言ったのではなくて……その……」
「ええ、わかっておりますわ。けれども、レティシア様を私達の事情につき合わせてしまったのも、また事実……」
「……お気になさらないで下さい。これは私が好きでやっている事です。それよりも……シルヴィア殿の具合は？」

レティシアと呼ばれた剣士がソフィアに抱かれている子供 シルヴィアへと視線を向ける。

その視線を追うようにソフィアも心配げな瞳で腕の中で眠る我が子を見つめた。

二人の視線を受けるシルヴィアは苦しそうに熱い息を小刻みに浅く繰り返しているだけだ。

その顔は赤く一目で高熱に浮かされている事が見て取れる。

「先程頂いたお薬で、今は落ち着いていますが……このままでは……」

「雨宿りが出来るのであればいいのだが、しかし……」

その言葉にソフィアの顔が曇る。

ここは普通の森ではなかった。この地域の人間は【瘴雨】の降り注ぐ森を魔の森と呼び、本来ならば好んで森へと入る者などはいないのだ。

魔の森とは【瘴雨】の影響で生態系が崩れ、木も、そこに住まう動物も魔のモノへと変化させてしまった森を指す。

その影響を受けるのは人も同じだが、大の大人ならばずっと浴び続けなければさほどの問題はない。だが、人として成長途中にある未熟な子供はそうはいかない。

死に至るならばまだましであろう。負の成長が止まらずに生き残ってしまつたら……

レティシアは異形なる魔物と化したシルヴィアを自分が切り捨てる想像を浮かべて、背筋にゾツとしたものが走る。

「先を急ごう」

「は……はい！ よろしくお願いします」

さっきまでより幾分早い歩調で二人は再び歩き出した。シルヴィアの火が付いたように感じる体をギュツと抱き締めながら……

冷房の良く利いた部屋で、恭平は今日もゲームに勤しんでいた。命の危機から二週間が経とうとしていたが、あれから何かをしようとする気力すら湧かず部屋に引きこもっている状態だ。

気絶から目が覚めて、恭平が最初にしたことはシャワーを浴びる事だった。

目が覚めた直後は、あれは夢だったのではないかと思ったが、自分の格好や玄関の覗き穴から見た外の光景に夢ではなかったんだと思知らされたのだ。

外をうろつく化け物達……時折、仲間に関かの合図を送っているのらしく、口を開けて何かを叫んでいる様子だった。

もちろん、見えない壁に守られて外界と完全に遮断されている部屋の中に、その声までは聞こえてこない。

覗き穴から目を離れた恭平は自分の股間に違和感を感じて、登山用の頑丈なズボンの股間がじつとりと濡れている事に気付いたのだ。

シャワーを浴びた恭平は部屋の隅に設置してある小型の物置へと向かい、中にしまっていた登山具を漁って、武器になるような物

を取り出していく。

出てきたものは下草を刈る為のマシエットと呼ばれる鉈に近いナイフとアメリカ産のクマ撃退用スプレー、更に登山に使うスキーのストックのような形の杖が二本でてきた。

登山に使うツルハシの形状を持つ、ピッケルは外に置いてきた事を思い出して苦い顔をする。

武器としては刃渡り五〇センチのマシエットや熊撃退スプレーの方がいいのだが、恭平として日頃使い慣れているピッケルの方が心持ち安心できるのだ。

恭平は武器を用意して、外の化け物を相手に戦う気などはさらさららない。

ただ、見えない壁で入って来れないとは解っていても、不安でどうしようもないのだ。

部屋に居ても外が見えてしまうベランダ窓にカーテンを閉めると電気を付けて、気を紛らわせる為にゲームをし始めた。そして、冒頭へと戻る。

「はあ……これで積みゲーもなくなるかあ……」

溜息をついてゲーム機の隣に置いてあるゲームソフトを見る。

そこには有名なアクションRPGやシューティングゲームなどが置かれていた。

視界の端にこれまた某有名ファンタジーRPGが未開封であったが、それを視界の端からも追い出す。

ファンタジーな世界でファンタジーなゲームをする。ある意味シユールな事だが、恭平がいるリアルなファンタジーの恐さは身に染みて知っている。だから、ゲームとはいえ死に掛けた経験からする気が起きるはずもなかった。

(しっかし……どうしたもんかねえ)

ゲームを消して立ち上がるとカーテンを薄く開けて隙間から外を覗き込む。

そこには化け物は居なくなったものの不気味な密林に降り注ぐ、黄色い雨が目に映った。

昨日の朝から降り出した雨は今日も小降りながらも降り続けている。

黄色と言っても染料とかで黄色くなっているのではないのだろう。雨が当たっている木々の色はそのまま、地面も水溜りはともかく地面自体は黒々とした大地のままだ。

(なんか、映画であつたっけなあ？ 雨に当たるとゾンビになつたりして……)

嫌な想像を浮かべてしまった恭平は頭を振って、ゾンビと戦う自分の姿を思考から追い出す。

しかし、次の瞬間にチャイムの音が部屋に鳴り響き、恭平はその場で飛び上がると近くにあつたマシエットを手にするのだった。

それは異様な光景だった。

魔物が蔓延る異形の森に白い箱の様な建物が一軒だけ、ポツンと立っていたのだ。

鬱蒼と茂る緑の中に浮かぶ白い空間……少しだけ雨脚の弱くなつた【瘴雨】ですら、その建物を汚すまいと避けているように見える。

「あれは？」

余りの光景に啞然とし立ち竦むレティシアの後ろから声が掛かっ

た。

ソフィアもレティシアの後ろから建物を見ると、レティシアと同じように呆然とその異様な光景に息を飲む。

「建物だろうか？ いや、しかし……こんな場所に？」

「私はあのような白い建物を今まで見たことはありません」

この世界の建物は石作りの建物が普通で、ソフィアが居た村では木造が当たり前だ。

レティシア達一行の目の前に立つ建物は、そのどれとも当てはまらない。

継ぎ目はなく白くの上ペリとした壁、見たこともないような金属で出来た扉らしい物、全てが常識外の建物だった。しかも、その建物は薄く光を放ちまるで【瘴雨】を浄化しているようにも見え、汚れ一つ無い白い壁と相まって神々しく見えた。

「ともかく、ソフィア殿はここでお待ちを……もし、人が住んでいるならば休ませてもらえるように交渉してまいります」

「いえ……私が参りますわ」

ソフィアの思いがけない言葉に、レティシアは目を見開く。

「なりません！ もしも危険人物や魔物の住処であったとしたら……」

レティシアの強い反発の言葉に、ソフィアは悲しげに顔を歪ませて首を横に振る。

「わかっています……ですが、この子、シルヴィアは限界に来ています。このままでは持って一陽……いえ、半陽も持てばいいほうで

しょう。そして、この子がもしも死んだら私も生きている意味がありません……。レティシア様はどうか行ってくださいまし。貴女様お一人でしたら苦も無く森は抜けられましょう……」

ソフィアの決意が籠る悲しい瞳を見つめ、それから腕の中で眠る……否、気絶しているシルヴィアの顔を見る。

シルヴィアの顔色は熱に浮かされていた赤い顔を通り過ぎ、青白く死人のような顔色へと変化していた。

恐らくは今【瘴雨】が止んだとしても、体力の限界を超えたシルヴィアが死ぬ事は想像に難くない。手持ちの薬も残り一つとなっている。

もしも、ここに人が住んで居なかったら……、人が住んでいたとしても薬がなければ、シルヴィアはソフィアが予想したとおりに半陽（二時間）もしないうちに命が尽きてしまうだろう。

「わかりました……ですが、ここまできてお二人を見捨てるのは騎士道に……いえ、人道に反する行い、死力を尽くしてお守りし、最悪最後を看取ることが、ソフィア殿の夫　ゼル殿への恩返しと思っております。どうか軽々に命を粗末になさらぬようお願い致します」「ありがとうございます……」

ソフィアは少し涙ぐみながら、頭を下げると異質な建物へと歩みを進めるのだった。

恭平はマシエットを片手に玄関へと近付いてゆく。

その足は微かに震えて、既に感覚すら失いまるで雲の上を歩いているようにも感じられた。

(あつ、くそっ！ 熊スプレーの方を持って来ればよかった……)

手にずっしりとくるマシエットの重みに気付いて後悔する。戻って持って来ればいいのかとも思ったが、恭平は戻ろうとせずに玄関へと近付いてゆく。

取りに戻るのとは簡単だが、部屋に戻ったら再度玄関に行く勇気が持てるか疑問だったからだ。

どんなに派手な音を立てようとも外には聞こえないと解っているはずなのに、つい忍び足になり、覗き穴に目を当てる際にも音を立てないように細心の注意を払う。

その覗き穴の向こうには……

それはまったくの偶然だった。

レイシア達一行がドアを一枚隔てた場所に立ち、ドアを叩こうとしたが境界のような壁に阻まれて、叩くどころか触れることが出来なかったのだ。

レイシアが鍛えられた肺活量を生かしてあらん限りの声で家の主へと呼び掛けるも、まったく反応がない。

「留守……なのでしょうか？」

「ふむ、かもしれん……。だが、ここで諦める訳にはいかぬでしょう？」

真剣な眼差しでレイシアはソフィアを見つめる。その瞳にはいざとなれば力尽くでも押し入ると無言で語っていた。

(どうすればいいのですか……あなた……)

ソフィアは腕の中でどんどん上がっていく娘の体温を感じながら、妻と子を置いて死んでしまった夫に心の中で問う。だが、当然返事など返ってくるはずも無く。そして、答えなど初めから決まっている。

「……………あう……………お父さ……………」

腕の中で今にも命の火が消えてしまいそうな娘が熱に浮かされたように呟くのが、ソフィアの耳に届いた。

「大丈夫……………大丈夫ですからね……………？ そう……………きつと大丈夫……………」

少しでも【瘴雨】から遠ざけるように 濡れてしまわぬように 壁際にシルヴィアを寄せて、その上にソフィアが覆いかぶさり、自らの体を雨避けに使う。

その時、抱かれているシルヴィアの足が壁際にあつた黒いポタンに触れた事に、ソフィアもレティシアも気付いていなかった。

恭平は覗き穴の向こうにいる人影を見て、一瞬呆けていた。

（人間……………人だ！ フードと雨で男か女か解らないけど、人だよ……………な？）

慌ててドアを開けようとした時に脳裏にあの醜悪な化け物の姿が脳裏に掠める。

だが、瞬時に頭を切り替えると玄関の鍵を開ける。

（大丈夫だよな？ あの見えない壁もあるし……………、あ！ でもどう

やって家に招きいれたらいいんだ？ 俺と触れてたら入れるのかな？)

愚にもつかない事を考えながらノブを回して、ゆっくりと扉を開ける。

そして、恭平は扉の前に立っていた人物と目が合った。そして、呆然となる。

覗き穴の魚眼レンズ越しではわからなかったがフードを被っていた人は女性だった。

意思の強さが窺える瞳、顔立ちはギリシャ彫像のようにバランスが取れた顔立ち、フードの隙間から見える美しい金髪が玄関から入る光で輝いている。

対してレティシアは警戒を深めていた。ドアが開いたのはいいものの、中から出てきた人物は見た事もないような鈍い光を放つ衣服を着て、大陸では見ない黒髪黒目……さらには魔法具のような光が外へと漏れ出していた。

何より、その人物が握っている物を目にした時に一瞬である想像が頭に浮かんだ。

乳母が聞かせてくれた民間伝承だ。深い森の中で旅人を襲ってはその肉を喰らう。食屍鬼の話だ。馬鹿馬鹿しいとは思うが、この異常な状況ならば在り得る話かもしれないと納得してしまっていた。

「ソフィア殿はお下がりを！ ハアツ！」

レティシアは目にも留まらぬ速さで抜刀すると剣を一闪させて、恭平の首筋に突きつけようとした。しかし、その目論見はあっさりと崩される。

細身の長剣は透明の壁に阻まれて、キンツと澄んだ音と共に半ばからポツキリと叩き折れてしまったのだ。

驚いたのはレティシアだけではない。連れのソフィアも恭平も驚きで目を見開く。

ソフィアは恭平の姿を見ると恐怖よりも何故か安心感が心を満たしていた。

ああ、これでシルヴィアが助かる。胸を撫で下ろした刹那だった。何故かレティシアが剣を抜き放ち黒髪の男性へと突きつけていたのだ。

ソフィアの顔から血の気が失せる。下手に相手の気分を害せば助かるはずのシルヴィアが助からないかもしれないのだ。

そう思った瞬間には体が動いていた。

恭平も腰を抜かさんばかりに驚いていた。玄関先に立っていた女性に見惚れていて気がつけば、自分へと折れた剣らしき刃物を構えていたのだから、驚くなと言うのが無理な話である。

（なに！？ なになに？ なんで俺は剣向けられるんだよ！ 俺はどこからどうみても無害な人間だろう……が？ あっ！）

今まで恭平は自分が右手で握ったままのマシエットの存在を忘れてしまっていた。

確かにドアを開けば、目の前には鋭利な刃物を握った男が立っている。しかも、全身が黒いジャージ姿で……。これではどこからどうみても不審人物である。

更には短めの髪はボサボサで無精ひげまで伸びている悪人面だった。

「あ！ ちょ……これは違ってくる！ 警戒してたっつか……」

今の状況に慌ててしまい向こう側には声が届かないということも

忘れて、マシエットを投げ捨てて必死に弁明する。

だが、そんな状態の恭平には構わず、玄関脇で恭平からは見えなかったソフィアが玄関の前まで無防備に歩み寄る。

そして、恭平の様子から声も届かないと判断して、見えない壁の前でシルヴィアの姿を見せると、必死に危急である事を訴える。

目からはポロポロと大粒の涙を零して、何度も何度も頭を下げた。

恭平はソフィアの必死な様子に腕の中でグツタリとしている子供を透明な壁越しに窺う。

フードでよくは見えないがそれでも顔は蒼白を通り越して青褪め、唇も寒さから薄紫色に変化しているのがわかった。

明らかに死に掛けの病人……しかも、子供だ。

目にした途端、恭平は頭が真っ白になり、先程までのやり取りも忘れて玄関から手を伸ばした。そして、ソフィアが抱く子供ごと、家の中へと引つ張り入れる。

一刻も早く濡れた子供　シルヴィアを何とかしてあげたいと思う一心の行動だった。

ソフィアもそれにつられて玄関へと入ってゆく。母子が玄関に入った事を確認した恭平は慌てて、自分の部屋へと戻り、タンスからありったけのタオルを取り出して、ついでに冷房を暖房へと切り替える。

その動きはさつきまで剣を見て怯える情け無い姿はどこにもなく手馴れている様子だ。

恭平の慌てる様子から害意は感じられず、ソフィアは心から安心するとシルヴィアを抱いたまま、その場でヘナヘナと崩れ落ちるのだった。

男の決意と女の希望

一人暮らしにしては多めのタオルを半分だけ取り出して手に持ち玄関へ戻ると、その床に座っている女性　ソフィアへと手渡す。ソフィアは初めて見る素材の布地に目を白黒させるが、その様子に気付いた恭平がタオルを手に取るとまだ濡れているシルヴィアの顔を拭ってあげる。

そして、ソフィアへ確認するように目を向けると、ソフィアも得心がいったのかシルヴィアのフードを剥ぎ取り、湿ってしまったている髪を拭き始めた。

その合間を見て、恭平はシルヴィアの額へと手を当てる。

(あつっ！　なんだよ。この熱は……)

余りの熱さに驚いて、額から手を離す。代わりに今度はフードが剥ぎ取られた為に露となった手を握ると、手の先は体温を失い氷のように冷たくなってしまっていた。

「あ……あの……」

「いつぐらいからこんな状態なんですか!？」

「いえ……あの……半光日前ぐらいから……ですが……」

「……半光日?　それってどれぐらいから……ああ、くそっ。そうか名称が違うのか……」

「大丈夫でしょうか!?!　私の子供なんです!　どうか……どうか……!」

(母子か……改めて見ると確かに似てるな……)

レティシアを氷の美貌と言うなら、ソフィアは砂漠のオアシスと言うべきだろう。

薄く蒼い髪は清廉な水を想像させ、今は緊張しているせいで歪んでいる顔ですらもどこか優しげに、少し垂れた瞳が美しさよりも可愛らしさを強調している。

娘のシルヴィアも似た様な風貌をしている事が何となく窺えるが、今は苦しげに顔を顰めて顔色を失った姿を見るに居た堪れなくなる。

「とりあえずはベッドに運びましょう。冷えた体のままではドンドン悪化します。俺の服を貸しますんで、向こうの部屋で着替えさせてあげてください」

ソフィアは申し訳なさそうに頭を下げるとシルヴィアと自分のフードを玄関に置いて、部屋の中に入ってゆく。

「あつ………!!」

「は………はいつ?」

「あー、いえなんでもないです。早く寝かせてあげましょう………」

ソフィアは怪訝な表情で、恭平の後をついて部屋へと向かう。その足元まで泥の足跡が点々と玄関から続いていた。

(まあ、西洋文化っぽいもんなあ………格好からして………)

そう、恭平が家に上げてから気付いたのは、ソフィアは靴を履いたままだったのだ。

お陰で玄関付近と部屋へと続いているダイニングキッチンには所々に泥が飛び散ってしまっていた。

(掃除すれば済む事だし、今は緊急事態だしな)

タンスからウニグロで買ったスウェットの上下を取り出して、ソファへと渡すがそれを受け取ったまま動こうとしない。

いくら暖房を入れていたとはいえ、濡れ湿っている衣服を着ていれば体は冷えてゆく一方だ。

「どうしたんですか？」

「あ！……いえ、こんな高価な衣服をお借りするわけには……もつと、ボロで構いませんので……あの……」

「いや、別に気にしなくていいから、そんなに高いもんでもないですしね」

その一言だけを部屋に残して部屋から出てゆく。

ゴミの中から空のペットボトルを取り出して、給湯器の温度を最大まで上げた湯を中へと注ぎ込む。熱湯とまではいかない温度の湯でペットボトルが軽く歪むが、どうせゴミである。

恭平は構わずにそれを二つ作ると自室のドアをノックする。

「あの、着替え終わりましたか？」

しばらく中でゴソゴソした音が聞こえた後で、内側からスライド式のドアが開かれる。

「は………はい。あの………ありがとうございます」

「いやいや、お礼は後でいいから、ちょっと失礼させてくださいね？」

恭平は返事も待たずに部屋の中へと入る。

さつきから何度かしたやり取りで相手の反応を見ながら、何かをしてあげると何故か異常に遠慮される事がわかつていたので、強引に物事を進める事にしたのだ。

案の状、少女はベッドに寝かされてはおらず、遠慮してタオルを下に引いただけの床に横たわらされていた。

体の上には自分が背負っていた荷物から出したのだろう、質素な布が掛けられていた。

それを見て一つ溜息をつく、シルヴィアを抱き上げて遠慮せず
にベッドへと寝かせる。

そして、布団を掛けてあげると布団の中……冷えた足首の下に湯を入れたペットボトルを簡易湯たんぽとして敷いてやる。

「あつ！ すみません……ありがとうございます……」

後ろで申し訳なさそうな声が聞こえたが、敢えて無視してシルヴィアの容態を見てゆく。

恭平はもちろん、医者でも医大生でもないがこの手の体調の崩れには、登山の経験上で何度も経験していた。

（風邪なんだろうけど、下手に薬で熱を下げたら拙いかも……まずは冷え切った手足を暖めて、体から汗をかかせる事を優先すべきだな……）

「この子のお母さんでよろしいんですね？」

恭平は振り返って、後ろで心配そうに窺っていたソフィアに向かって問い掛ける。

「はい！ その子の母親です！」

（とても年齢的に母親には見えないけど、この世界の常識的にはいいんだろっな）

「今からいくつか質問しますから答えてください。解らなければ解らないで構いません」

恭平の問い掛けにソフィアは緊張した面持ちで小さく頷き返してきました。

「どれぐらい前に意識を失いましたか？」

「えっと、一陽前ぐらいになると思います」

（また、解らない単語が出てきたか……言葉のニュアンスから結構前みたいだけど……）

恭平は聞いた事もない単語に戸惑うが気にしている場合ではない。頭に浮かんだ疑問を思考の端へと追いやると、次々と質問をしてはソフィアが答えるといったやり取りを繰り返した。

恭平が聞いたところ、水も【瘴雨】のせいではなく前から飲ませていないこと、痙攣は今までしていないこと。そして、重大な事にこの症状は【瘴雨】と呼ばれる雨の影響で引き起こされたものであり、心配をしたウィルス性ではないらしいことを聞き出すことができた。

「薬とかはないんですか？」

「あっ！ 薬でしたらレティシア様……ああ、剣を持っていた女性が持っています！」

そこで恭平とソフィアは同時に素っ頓狂な声を上げた。
先程からレティシアと呼ばれた女性の姿を家で見ていないのだ。

恭平とソフィアは慌てて、玄関へ向かいドアを開く。そこには、
レティシアがまるで檻に入れられた熊のように玄関前でウロウロと
していた。

玄関に姿を現した恭平に気付くと、猛然とした勢いで近付いてく
る。だが、その姿も透明な壁に阻まれて一定の距離からは近付いて
これないようだ。

透明な壁の向こうでレティシアは壁を殴りつけながら、口をパク
パクさせて何かを訴える。だが、先程と同じで声は全く聞こえてこ
なかった。

「すつごく、怒ってますね……ははっ……俺ヤベェ」

恭平は少し前に見た剣を構えているレティシアの姿を思い出して、
冷や汗が流れる。

まさに命の危機だ。しかし、だからと言って二人の連れであるレ
ティシアを入れないわけにもいかないの……切羽詰った恭平は、
ソフィアに助けを求める視線を向ける。

ソフィアもソフィアでどうしたものか悩んでいるようだが、また
ここでレティシアに問題を起させる訳にはいかない、と判断を下し
たのだろう。慌てて恭平に頭を下げた。

「も……申し訳ありません！　すぐに話してきますので結界を解い
てもらえませんかでしょうか！？」

「はえ？　け……結界って……ああ！　この壁みたいなのは、俺が
どうこうしているんじゃないんで……と……とりあえず一度外に出
て暴れないようにだけ、説得していただけませんか？　病人も居る

事ですし……」

「はい。はい！　すぐに！」

ソフィアは慌てて外へ出ると、外でレティシアと二言三言を頭を下げながら話し始める。

無論、恭平には彼女達の声は聞こえないのだが、どうやら不承不承ながら頷いたレティシアの表情から殺気だったものが消えたのを見て取れた。

一方のソフィアは安堵の表情を浮かべると、困ったような笑顔で、レティシアに頭を下げた。今度は恭平へと向き直り、深々と頭を下げる。

恭平はその姿にホッと胸を撫で下ろすと、透明な壁の外へと手を差し出す。

小さく柔らかいソフィアの手がそれを握り、レティシアはソフィアの空いている手を握る。優しく引く恭平の手に誘われるまま、ゆっくりと二人が玄関へと入ってきた。

レティシアが透明な壁のあるところを、通る際に体がビクツを震えたのはご愛嬌だろう。

「さて、説明していただくことが……？」

入ってきた早々にレティシアは腕を組むと、恭平を睨みつけながら口を開いた。

その声音に怒りの色が見え隠れするが、母子を拉致したと勘違いしているとかではなく。単に放って置かれた事と自分だけが壁に阻まれた理不尽さに怒っているようだ。

「いや……その……説明より先に薬を出していただけませんか？　子供の容態が悪化しないうちに……」

「そうでした！　レティシア様……誠に申し訳ないのですが……」

レティシアはハツとしたような表情を浮かべると、慌てて腰から皮袋を外して中から小さな丸薬取り出して、ソフィアへと手渡す。それを手に急いで部屋へと向かうソフィア。それを恭平達二人が後を追う。

部屋は暖房のせいでも外よりもムツとする熱気に包まれているが、必要なのは子供に汗をかかせる為なので、暑い事は気にしないようにして中へと入ってゆく。

ベッドの上を見ると額に汗を浮かべている少女の姿があった。顔色は幾分か赤みを取り戻している事に安堵する。

「あの……お水か何かを頂けましたらありがたいのですが……」

「あっ！ ちょっと待っててください！」

（あー……くそっ、俺も落ち着いてるようで動転してるな……まずは水分を取らせる事が最優先だろうが！）

恭平は自分の頭を拳で叩くと冷凍庫の中から氷枕を取り出して、コップに水を入れて砂糖を小さじ一杯と塩を二滴み程入れてよく掻き混ぜる。

ソフィアから聞いた情報から脱水症状も起していると思われる事から、スポーツドリンクがわりだ。

二つを手を持ち、部屋へと戻るとコップを手渡して、氷枕にタオルを巻いてから頭の下に敷く。そして、足元の布団を捲り上げて足に触れると、さっきまでとは段違いに温かみが戻っていた。

低温火傷を防ぐ為にペットボトルを取り出して、夏用の薄い布団の上に置いてやる。

「それは？」

「これは氷枕といって頭の熱を下げるために冷やす物です」

レティシアは頭の下に敷いた氷枕を指を差して胡散臭げに見つめるが、指先で少し触れてみて驚いた顔を浮かべるが、どうやら納得したようだった。

恭平はそんな様子のレティシアを視界の端に捉えながら、ソフィアへと視線を合わせる。

すると、そこには恭平から手渡されたガラスコップをどうすればよいか解らずに右往左往していた。

「それは経口補水塩と呼ばれている物で、その……効率よく体に水分　えーと、水を行き渡らせる味のある水です。毒ではないので安心してください」

「あ……いえ、そう言うわけでは……はい……」

恐る恐るコップに口をつけると、口の中に広がる少し甘いがなんともいえない甘みに、一瞬だけ驚いた表情を浮かべて、未だ意識を取り戻さない娘に向かって口移しで飲ませる。

その後で薬の丸薬と一緒に甘い水を口に含み、シルヴィアへと与えた。

「あの……レティシアさんでよろしかったですか？」

恭平はソフィアがシルヴィアに薬を飲ませる様子を見て、レティシアへと問い掛ける。

声を掛けられたレティシアは心配げに見つめていた表情を引き締めると、恭平へと視線を向けた。

「む？　何用かな？」

ややきつめの視線を向けられて、恭平は腰が引けるがそれでも聞

かなければと口を開いた。

「えっと、あの薬なんですけど、どのような薬なんですか？ 熱を下げる薬だったりとか？」

「いや……あの薬は瘧雨の毒を解毒する薬だ」

「え？ だったら、もう大丈夫なんですか？」

水分が補給されて呼吸が少しだけ穏やかになったシルヴィアを、レティシアは心配そうに見つめる。

「ただ、しょせんは解毒でしかないのだ。熱はまだしばらく下がらぬだろう。熱が落ち着くまで体力が持てばいいのだが……」

その言葉を聞いて、ソフィアは俯いてしまい背中に悲壮感が漂う。恭平はレティシアの言葉とソフィアの姿を見て、一つの決心した。

「事情はわかりました。俺も出来る限りの事はして上げたいと思っています。ただ……俺の事を信用していただけますか？」

レティシアはさっきまでとは違う恭平の雰囲気に見詰めた表情を浮かべ、ソフィアはベッドに向けていた視線を弾かれたように上げると驚いた表情の中に喜色を浮かべて恭平をみた。

「失礼だが……貴殿は治癒士か賢者であるのか？」

「ああ、いえ違います。その迷子って言うか事情があって、ここに飛ばされたと言うか……」

一縷の望みを込めて、レティシアは恭平に問い掛けたが、その歯切れの悪い物言いに落胆の色を見せる。

神殿に仕える治癒士や魔の森や魔法薬に詳しい賢者ならばと思っ

ただ。しかし、レティシアの目で見て、恭平がそんな大層な人物には見えない。

小さく溜息を吐くと、レティシアは呆れたように口を開く。

「申し訳ないが……我々にとってシルヴィア殿は大切な……」
「信用します！」

レティシアの言葉を遮り、ソフィアの凜とした声が部屋に響いた。突然の事にレティシアは驚いた表情で、ソフィアを見つめる。

「ソフィア殿!？」

「申し訳ございません。レティシア様のお気持ちは大変うれしく思います。ですが、私達にはもう成す術はないのが実情……、この御方とは会って間も無く名も知らぬ仲ですが……短いながらも今までの行いを見る限り、信の置ける御方と思います。」

それに恐らくですがあれほど自信に満ちた言葉だったのです。きつと何らかの方法をお持ちだと存じ上げます」

「え!？ そうなのですか？」

ソフィアがニツコリと微笑みながら、レティシアは驚愕に目を見開いて、二人の視線が恭平に向けられる。

「うえっ……あ、いや、過剰な期待は困りますけど……、俺も色々調べた上で治してあげたいというのと、後は試してからになりませんが解熱剤……熱冷ましの薬ですね？ もありますから、何とかなると思っています」

薬という単語を聞いて、ソフィアの顔が明るくなる。レティシアも難しい顔をして何やら考えていたようだが、渋々ながらも頷いて

みせた。

「先程は失礼致しました。シルヴィア殿は私にとって恩人の大切なご息女なのです。」

「どうか……どうか！ よろしくお願い致します！」

「私の娘を……シルヴィアを……どうかよろしくお願い致します」

二人は恭平に向かって腰を折り、深々と頭を下げる。

それを見て、恭平は急に信用に対する責任の重さを感じて、軽々しく“信用”などと口にした事が恐くなったが後悔はしなかった。

（子供があんなに苦しんでいるのに、何もしないなんて後味が悪すぎるだろ！）

恭平は両頬を手の平で強く叩いて気合を入れる。助けると決めたのだ。全力で助けようと、新たに決意を固めるのであった。

笑顔の時 おじさんと呼ばないで……

「おかしい……いくらなんでもこれは……」

恭平は目の前の光景が信じられなかった。

あれから、恭平は一刻を争うと解熱剤を子供が飲む量を更に半分にしてから与えたのだ。

今まで科学薬品というものを飲んだ事が無い事を考慮しての事だった。恭平は何かの本で薬を一度も服用した事が無い人に薬を与える話を覚えていた。

その中では医者も驚くほどの高い効果をあげたというのだ。この世界の住人を原住民扱いは酷いかもしれないが、科学薬品を飲んだ事が無いという点では同じ事である。

（確かに利き過ぎるかもかもしれないと思ってたけど……これは異常だろ！？）

シルヴィアの額に手を当てながら、信じられないものを見るような気持ちで血色もよくなり、呼吸も体温も落ち着いた少女の顔を見つめる。

その横では心配そうに見つめる母親のソフィアとレティシアの姿があった。

「そ……それでどうなのでしょうか！」

娘の額に手を当てたまま、驚いた顔を浮かべ何も言わない恭平に嫌な予感が走る。

「あ……いや、確かな事は言えないですけど、もう大丈夫だと思いません。あ！でも、一応数日は大人しくしておいた方がいいですね。熱は下がってますけど、体力はかなり消耗しているでしょうから」

恭平の言葉に安堵すると同時に感極まったのだろう。水色の瞳から見る見る涙が溢れ出し、大粒の涙が頬を伝ってゆく。

「ああ……ありがとうございます！ありがとうございます！なんとお礼を……」

「ああ、いいです！いいです！気にしないでください！頭を上げてください！」

涙を零しながら蹲るように頭を下げ、顔を伏せるソフィアに、感謝をされ慣れていない恭平はうるたえる。

「私からも礼を言わせていただきたい。本当にありがとうございます。それと入り口にて剣を向けた非礼を心からお詫び申し上げます」

レティシアも恭平へ向き直ると居住まいを正して深々と頭を下げる。

恭平は一気に居辛くなった空気から逃げようと立ち上がった。

「お腹……そう！お腹空きましたよね！？この子ももう直ぐ目を覚ますと思いますので、病人でも食べられるものを作ってきます！」

それだけを言い残し、部屋から立ち去ろうとした。その時だった。

「……………。オジちゃんだあれえ？」

うるたえて声を抑える事を忘れたせいか。はたまた、立ち上がる

うとベッドに手を付いたのがいけなかったのか。ベッドで眠っていたシルヴィアが、微かな呻き声と共に瞼を開き、青く綺麗な瞳を覗かせたのだ。

「あ！ や……やあ、目が覚めちゃったか。ごめんな？ 起しちゃうって……」

突然聞こえてきたシルヴィアの声に、恭平は驚いたがなるべく恐がらせないように笑みを浮かべて、優しく語り掛ける。

「ママはあ？ どこお？」

見た目は五歳から七歳に見えるが、その年齢とは思えぬほどに言葉はたどたどしく。熱でどれだけ体力が落ちているかが窺い知れた。

「ママはね。すぐそこにいるから安心していいよ。お腹は空いて無いかい？」

「ん〜ん……」

少し不安そうだったシルヴィアも恭平の優しい口調に安心したのか。布団の中で微かに首を横に振る。

「そっか……。でも、もう少ししたらお腹が空くと思うから、何か作ってあげよう。それまでママとお話して寝ていような？」

「……………」

（まだ、安心はできないけど、これだけ受け答えできるって事は意識がはっきりしてるって事だよな？）

まだ、体のたるさが残っているのか弱々しく頷くのを見て、恭平

は後ろで心配そうにしていたソフィアへと目で頷いて見せる。

母と娘の感動の場面に部外者は邪魔者だと、恭平は立ち上がったダイニングキッチンへと向かった。

大き目の鍋に研いだ米を入れて煮込む。恭平は病人にはやっぱりタマゴ粥だろうと思い、作り始めたのだ。鍋の火加減を見ながら色々考える。

お粥の事ではなく、この世界のこと……人と出会ったお陰で、生きる希望が湧いてきたと同時に不安も出てくる。

恭平としては、人類がいる事がわかったのは本当にありがたいことだった。家に引き籠もりゲーム三昧だったとはいえ、何も考えずに済んだ訳では無い。ふとした時に人類と呼べるものが居ない世界だったらどうしようとか、不安に感じていたのだ。

だが、文明を持つ人類がいるという事で、別の不安も湧いてきた。恭平にとって、この世界は本来居るべき場所ではない。この世界にとつての恭平は単なる異物であり、居場所などありはしない。

それは単に知り合いがいないとか、家族がいないとかではなく、文明を持っているという事は法があるという事だからだ。

人が動物とは違う所はそこだと恭平は思っている。人が集まって集団となると必ず公式非公式に関わらず秩序が存在し、それを取り締まる法が出来る。

その法において、自身の身分を証明できないというのは致命的だった。最低限の人権……生存権ですら認められない。

さらには三人の来訪者が身に付けていた服装や剣といった原始的な武器を見る限り、そこまで穏やかな世界でもない事は想像に難くない。

(ゲームで言う所の村人A以下なんだよなあ……俺……どうしたもんか?)

煮立て過ぎないように鍋を掻き混ぜながら、深く溜息を付いた。人のいる場所で住みたい。けれども、人のいる場所は恭平にとつては、ある意味ここと大差がない危険な場所でもあるのだ。

「なんで、こうなっちまったんだか……」

ダイニングキッチンに恭平の深い溜息が響くのだった。

部屋ではシルヴィアのはしゃぐ声やら楽しげに話す声がしていた。それにソフィアは心温かい微笑みを浮かべて、頷いたり相槌を打ったりとしている。

「しかし、シルヴィア殿を治した薬といい。この部屋の明かりや見た事もない魔道具といい。あの方はもしかして、名のある御方なのかもしれません」

レティシアは部屋の中を見回して、ポツリと呟いた。それに同意するように、ベッドに腰掛けたソフィアもシルヴィアの頭を撫でながら、周囲を見回す。

天井から吊るされた蛍光灯を見たり、清涼な風を送り出しているクーラーを見つめる。

「かもしれませんね。この家の周囲に張り巡らされている結界も、あれほど頑強な物を見たこともありません」

「何か事情があるのか……？」

ソフィアはレティシアの言葉に含まれる警戒の色を感じて、静かに首を横に振る。

「どんな事情があるにせよ。この子の命を救って頂いた事には変わりありませんわ」

シルヴィアへと優しい瞳で見つめる。

ソフィアの言葉には咎めるような響きはなく、純粹に感謝の気持ち溢れていた。それを聞いていたレティシアは少し寄っていた眉根を緩めて、笑みを零す。

三人は魔の森に入ってから四日しか経っていないはずだが、こんなにのんびり出来たのが久しぶりのように感じた。

野営の時ですら魔除けの香を焚き、碌に安心して眠れる状況ではなかったのだ。

ゆつたりとした時間を堪能していると部屋の扉が開かれた。ふわっといい匂いが漂い、恭平が部屋に入ってくる。

「お腹が空いただろうと、ご飯を作ってきたんですが……」

ダイニングキッチンのテーブルにはお粥と簡単な料理が並べられ、いい匂いはそこから漂ってきているようだ。

「ああ！ そんな……何から何まで本当にありがとうございます！」

暖炉が無いから食事と言っても精々が硬いパンか、あっても冷えたスープだろうと思っていたソフィアは湯気が立つテーブルの料理に恐縮する。

「気にしなくていいです。そんなに感謝される事はしてません。困っている時はお互い様でしょう？ それに色々聞きたい事もあるんで、情報料の先払いとでも思ってください」

「……聞きたいことですか？」

苦笑交じりの言葉に、ソフィアは怪訝な表情を浮かべ、レティシアは少しだけ警戒する。

「ええ、こちらの事情も話したいと思いますので……。あ！ そう言えば名前も言ってませんでしたね！ 俺の名前は志賀恭平と言います。名前が恭平で姓が志賀です」

「この度は助けていただき感謝の言葉もございません。私の名前はソフィアと申します。こっちが娘のシルヴィアと申します。ほら、シルヴィアご挨拶は？」

ソフィアに促されて娘のシルヴィアが母の膝から体を起して、ベッドの脇に立ち上がると母と同じようにペコッと可愛らしいお辞儀をする。

「う……ありがとう……おじさん！」

「お……おじ……どういたしまして……けど、お兄ちゃんと言ってくれるとうれしいな？」

シルヴィアの屈託の無い笑顔から飛び出してきた言葉に、恭平はシヨックを受ける。だが、サボサの髪に無精ヒゲを生やした自分の容姿では、そう言われても仕方が無いと苦笑して頭を掻いた。

「シルヴィア！ も……申し訳ございません！ お若いです……よ？」

「いや、気にしてないんで……ははっ……」

フォローになっていないソフィアの言葉に、恭平の心はさらにダメージを受ける。

「最後は私だな？ 名のる事が遅れて申し訳ない。私はレティシアと申します。故あって家名を名乗る事はできないが、どうかご容赦の程を……」

最後にレティシアはその場に立つと、折り目正しく綺麗な礼を見せる。

「それは俺も同じなんで……、しょうがないですよ。非常事態だったんですから！ それより自己紹介も終わった事だし、飯にしませんか？ 作った料理が冷めないうちに……」

食事という言葉に反応したわけでもないだろうが、タイミングよく部屋に腹の虫が鳴く音が響く。

恭平が音がした方に目を向けると、そこには冷たい印象だったレティシアが顔を赤くしてにして俯いていた。

「あー！ 虫さんが鳴いたあ！」

「あつ……。こらー！」

シルヴィアの子供らしい無邪気で酷い言葉で、レティシアは耳まで真っ赤になる。恭平はやれやれと肩を竦めると助け舟を出すべく口を開いた。

「あははっ、お兄さんのお腹が空き過ぎてお腹の虫に叱られちゃったよ。さあ、シルヴィアちゃんもお腹が空いたろ？ 早くご飯にしようか？」

恭平はそう言うと、さっさとダイニングキッチンへと戻る。シルヴィアもベッドからゆっくり降りると、恭平の後へと続いてゆく。

「……悪い人では無いようですね……？」

「ええ……、優しい方ですね……。さあ、レティシア様。遠慮も過ぎれば不敬と申しますし、遠慮はやめて食事を頂きに参りましょう。また、虫に叱られぬうちに……ふふっ……」

「……っ！ ソフィア殿まで……勘弁してください……」

レティシアはまだ顔を赤くしたまま、ジトツと横目で睨むと、ソフィアはコロコロと笑いながら部屋から出てゆく。

肩を落として大きく溜息を吐くと、レティシアもダイニングキッチンへと向かった。また、腹の虫に叱られる前に……

世界の成り立ち、恭平の決断

食事も終わり、四人はお茶を啜りながらゆったりとした時間を過ごす。

「本当にこんな豪華なお食事をいただいてもよかったですでしょうか……？」

「あー……。それほど気にしないで下さい。理由は後で話します」

ソフィアが頬に手を当てて、不安そうに呟く。

その様子に、恭平は改めて現代とこの世界の違いを思い知らされる。

恭平を除く三人は名残惜しそうに、残っていた甘い香りのする汁跡を見つめていた。

料理と言っても、恭平は大した物を出したつもりはなかった。数少ないレパートリーの中から簡単に作れそうな物を選び末のメニューは、卵焼きにベーコンを入れた物とタマゴ粥、それと冷蔵庫に残っていた唯一の野菜である。白菜の浅漬けだけだ。

それですらソフィアとレティシアは目を白黒させて、シルヴィアは美味しそうな香りがする料理の数々に喜びを表していた。

更には食後のデザートに桃の缶詰まで出されたのだから、甘い蜜がタップリのデザートを前にして下級貴族の夕食に招かれたかのようだった。

「シルヴィイは旨かったか？」

恭平はシルヴィアに笑みを浮かべて問い掛けると、満面の笑みが帰ってきた。

「うん！ すっごくおいしかったあ！ キョウはお料理上手だね」

「ありがとう。また、作ってあげるからな」

「ほんと！ やったあー！」

「くら……シルヴィ……」

行儀悪く椅子の上に入ったシルヴィアをソフィアは恥ずかしそうに注意をするが、恭平が笑顔で手を上げて止める。全身で喜びを表現されるのは作った者にとって、とても嬉しく感じたからだ。

食事を介して熱に因る後遺症がないかを会話をする事で観察していたのだが……、そうして話をしてゆくうちに、いつの間にか愛称で呼び合う程にまで仲が良くなっていった。

女性との会話に苦手意識を持つ恭平だが、相手が子供と言う事もあり気後れせず、自然に会話をしていたのも良かったのかもしれない。

食後の和やかな時間も終わり、シルヴィアが欠伸を漏らす頃になると日は既にどっぷりと暮れていた。

「シルヴィ。眠たいのならそろそろ寝ましようか」

「うん。元気になったとはいえ、病み上がりですから、もう寝かせてあげてください」

うつらうつらと船を漕いでいたシルヴィアが倒れないように支えながら、恭平はソフィアの言葉に同意する。

しかし、シルヴィアは眠たげに目を半眼に開いて、恭平の袖を掴んだ。

「やあ……、キョウとお話ししゅうのお……」

拒絶しながらも夢の世界へと旅立って行ったのだろう。言葉の最

後は呂律も回らず、袖を掴む手も離れていつてしまった。

恭平は壊れ物にでも触れるように優しく、シルヴィアの小さい体を抱き上げると、ベッドへと連れてゆく。

これは食事中に決めていた事だ。ソフィアは家主のベッドを使うなど……と頑なに固辞したが、子供である事と更には病み上がりでまだ油断はできないと説得すると、渋々ながらも恭平の提案を受け入れてくれた。

「さて、聞きたい事があると言われておりましたが、何なりとお聞きしてください。我々に答えられる事なら、なんなりと答えましよう」

シルヴィアがベッドの中で、完全に夢の世界へと旅立った頃を見計らって、レティシアが椅子に姿勢を正して口を開いた。その姿は凜として、食前の醜態など微塵も感じられない。

恭平はレティシアの言葉に顎に手を当て考える。

聞きたい事は数あれど、何から聞いていいやら見当がつかない。

(ここで俺の事情を話すべきか、否かだよなあ……)

『このことは違う世界からきました』と直球で言ったのならば、普通ならば奇人扱いされる恐れが大いにある。

だが、恭平の事情を知る人間を一人でも最低確保しないと、人が居る所へ下手に行く事が出来ないのが現状だ。

道の真ん中を歩くだけで罰せられたり、極端を言えば黒髪であるとか肌が黄色いと言うだけで処刑されるような法が無いとは言えないのだ。

地球の歴史を鑑みれば十分ありえる事だった。日本の生類憐令や魔女狩りなどが有名であろう。

人と違うだけで異端として狩られるような世情ならば、この世界

でもっとも異端な存在である恭平は人と接触する事を避けるべきだと考えていた。

既に触れ合ってしまった三人は別としてである。

「最初に一つお聞きしたいのですが、俺を見て最初に何を思われましたか？ 正直に教えてください」

「……初見で何を思ったか……ですか？ ふむ……」

口にする前から緊張で早かった動悸が、さらに激しさを増す。知らず知らずのうちに、恭平は睡で喉を鳴らしていた。

ソフィアはシルヴィアを寝かしつけるために恭平の部屋にいる。今ここに居るのは、レティシアと恭平の二人だけ……。その二人の間は奇妙な沈黙が支配していた。

片や今後の人生を左右する一言を待ち、片や恩人に対して正直に言っているものか悩む。

その沈黙を破ったのはもちろん、レティシアであった。

「……悪人面……」

ポツリと口から零れたように呟かれた言葉に、シヨックを受けて肩を落とす。

「あつ、いやいや！ 申し訳ない……。今のは言葉のアヤで！ 本当は夜盗か盗賊の住処か、人を誑かして喰らう魔……いや、これはちが……」

フォローのつもりか矢継ぎ早に言葉を放つが、それら全てが鋭利な刃物の如く、次々と恭平の心へと突き刺さってゆく。

口元に笑みを張り付かせてはいるが、どんどん暗くなっていく恭平の顔にレティシアの額に冷や汗が浮かぶ。

「いえ……。昔から言われているので、気にしてないですよ……ははっ……悪人面……」

がたいの大きさや他者を威圧する筋肉に、登山仲間からはいつも登山熊だの山賊の頭目だのと言われて慣れていた。しかし、女性に言われるとまた別のショックを受けるのはしょうがない事だろう。

「……本当に申し訳ない！」

「こちらこそ気を使わせてすみません。気にしないでください……。俺が正直に言ってくれと頼んだんですから、それよりも本当にそれだけなんでしょうか？ もしかして……その……異端だとか……忌まわしいとか……そういうのはないんでしょうか？」

その言葉に、レティシアの表情が少し動く。

「シガ殿は何か異端染みた事をなさっておいでか？ 魔を信望するような事を……」

先程とはまた違う緊張感が部屋に満ちる。

女性としては長身だが、決して大柄とはいえないレティシアの姿が、恭平には何倍にも大きく感じられる。それは俗にいう殺気と呼ばれるものだ、今の恭平には知るはずもなかった。

知らない内に、恭平の手にはじっとりとした汗を掻き、体が硬直して身動きが取れなくなる。

「それぐらいになさってください。レティシア様……。どの様な御方であれ恩人なのですよ？ それとも恩を仇で返されるおつもりならば、私にも考えがあります……」

恭平は声のした方に視線を走らせると、少し怒った表情を浮かべて腰に手を当てたソフィアが、いつの間にかダイニングキッチンへと入り、レティシアを眼光鋭く睨みつけていた。

(いつの間に入ってきたんだ。まったく気付かなかった……)

恭平は呆然と救いの女神であるソフィアを見つめていると、体を押さえつけていた威圧感が消えている事に気付いた。

「……ソフィア殿、申し訳ありません……。シガ殿にもまた、失礼を働き申し訳ありませんでした。……ただ、これだけはお答えしていただきたい。シガ殿は魔を信望してらっしゃるのでしょうか？」

レティシアは一つ深呼吸すると、さっきまでとは打って変わって、ゆっくりと穏やかに聞く。

前と同じ質問に、ソフィアが何かを言おうとするが、恭平はそれを手を上げて静止した。

「魔を信望　　と言う言葉の意味はわかりませんが、決して他人に恥じる事はしてしないと誓います」

恭平は自分を見つめるレティシアの真剣な視線を正面から受け止めて、堂々と答える。

その答えに納得したレティシアは緊張を解すように息を吐くと、恭平に頭を下げる。

「あらぬ事を疑い、本当に申し訳ありませんでした」
「別に気にしていません。それよりも魔を信望するとはどういう事なのでしょうか？」

心底しらないという表情の恭平に、レティシアは驚いた表情を浮かべる。

「ご存知じゃないのですか？ それは……」

「続きは私がお話しましょう……」

ずっと、立つて成り行きを見守っていたソフィアが、椅子に腰掛けながら言葉を引き継ぐ。

恭平はソフィアへと向き直ると一言、おねがいします。とお願いする。

ソフィアは大きく息を吸うと、その澄んだ声で話し出す。否、謡いだしたと言うべきだろう。

その歌声が低く高く、優しく静かに部屋の空気に沁み込んでゆく。

「遙かに遠い昔、神々が地上から姿を消した頃のお話……
地上が楽園と呼ばれていた時代、世界に二つの影が落ちた。

一つは人 時に欲望を……時に友愛を持ちて世界へと広がる。

もう一つは魔 闇にして影……理を侵し……理を喰らうモノ。

魔は理を喰らい一つの意思とならん。その意思の名は魔王……

魔王は森を喰らい、海を燃やし、空を焦がした。

世界から理消えし暗黒の時代の訪れ……人は嘆き悲しんだ。

神々は人の嘆きに憐れんで一つの光を導く。光は闇を照らし、影を散らす。

魔王消えし時、光もまた消えた。一つの種を世界に落として……」

一息に謡い終わると、シルヴィアとそっくりな笑みを浮かべて、恥ずかしげに頭を下げた。

(……魔王 悪魔信仰の類か……それにしても魔王って……本当にゲームの世界みたいな異世界なんだなあ)

静かに聞き入っていた恭平は歌が終わると思考する。

あの化け物を見た時から、漠然とだが地球では無い世界なのだと感じてはいたが、魔だとか理だとか、拳句、魔王とやらまでいた世界だと言われて改めて実感する。

(ここは俺にとって完全に未知の世界って訳か……)

「これが世界に伝わる伝承なのですが、魔を信望する者とは、魔王の復活を望む者を指します。どうでしたでしょうか？ 解りにくかったですか？」

黙り込んでいる恭平にソフィアが心配そうに顔を見つめてきた。

目の前にいる女性……ソフィアは恭平から見ても、人間である。

髪が蒼という地球には自然に存在しない髪色で服装もなめした革や簡素な布で作られた中世ヨーロッパパやゲームのキャラクターみたいだが、獣の耳があるわけでも尻尾があるわけでも無い。

(相手が全くの別な存在じゃなく同じ人間なら理解さえすれば……)

「……なんでもないです！ あの……歌？がお上手なんですわ」

子持ちとは思えない美女に見つめられて、恭平は急に意識してしまいドギマギして素直に感想を述べる。

「え……？ いえ！ そんなっ……」

恭平から、まさか褒められるとは思ってもみなかったソフィアは、恥ずかしさから白く綺麗な肌を首筋まで真っ赤に染める。

「ん……ん……ん！　それで解られましたか？」

変な雰囲気を変えるように、一つ咳払いをしてから、レティシアは恭平に問い掛けた。

「はい。魔王を信仰する者を警戒されていたんですね？　安心してくださいと言っても、信用はできないと思いますので、俺がここにいる事情を話したいと思います。おそらく、俺の話は信じがたいものがあると思いますけど、真実しか話していない事を誓っておきます」

真剣な眼差しと言葉に、二人の女性は神妙な表情を浮かべて小さく頷いた。それを見た恭平も安心して、深呼吸をすると語り始めた。
世界を渡った奇妙な物語を……

母娘の事情と悲劇、男の優柔不断

恭平が全てを話し終えると、室内に深い……とても、深い溜息が辺りに響いた。

女性二人が余計な口を挟まずに話を黙って聞いていたのは、恭平の話を折らないように気を使ってではなく。単に荒唐無稽な話だったためだ。

パソコンで画像や動画を検索して、現代の映像がなければ信じてもらえなかった可能性もあっただろう。

レティシアは怪訝な表情を浮かべ、ソフィアはどこか困ったような表情を浮かべている。

テーブルに置かれていた既に温くなってしまった水で口を湿らせて、レティシアは恭平の目を真っ直ぐに見据えて口を開く。その瞳にはもう警戒の色は無くなっていた。

「正直に言いましょう。別の世界から来たなどとは俄かには信じ難い……。街中で耳にしたならば気が違えたとも思うでしょう。だが、これを見る限り嘘を吐いているとは思えない。それにそんな嘘を吐く理由が無い……。しかし……。ソフィア殿はどう感じられた？」

テーブルに置かれたノートパソコンを視線で指して、齒に衣を着せず感じた事を正直に口にする。それを恭平が望んでいる事だと感じただからだ。

そして、斜め前に座るソフィアに視線を投げかけた。

「私もほぼ同じ意見なのですが……。一つだけ……。キヨウヘイ様はこれからどうなさるおつもりですか？」

「これから……。ですか？」

ソフィアの問いに、恭平は訝しげな表情を浮かべてオウム返しに聞く。

「そうです。言葉は悪いですが、キヨウヘイ様の言葉が真実であるならば……その……キヨウヘイ様はこの世界で寄る辺無き孤独の身……。更にはこの家の立つ周囲は、魔に侵された危険な森なのです。この家の結界は強固で食料の心配がないのならば、この家で住み続けるも一つの選択……。ですから、これからどうなさるおつもりなのかと……」

それは来訪者である三人が来てから、恭平も考えていた。

もしも、元の世界に帰れるならば、この家に住み続けた方が可能性はある。しかし、帰れなかったとしたら？ ソフィアの言うところの場所なら、残ると選択した場合は数年か？ もしかしたら数十年は孤独に苛まされながら生きる事になるだろう。

パソコンが使えると言っても、こちらからはなんらアクションを起すことが出来なければ、楽しい人達を見るだけという行為は、逆に恭平の精神をすり減らす結果となるだろう。

そう考えるだけでゾツとする。元々、恭平はゲームやパソコンに興じるよりも、外に出てスポーツや登山を好むアウトドア派なのだ。外に一步も出られない状況に耐えられるはずはない。

しかも、外には恐ろしい化け物が跳梁跋扈しているというのだ。

そう遠くない未来に気が狂ってしまつか。耐えられなくなり一か八か外に出て、化け物の餌食になるのは想像に難くない。

可能性はそう高くない帰れる可能性に掛けるべきか？ もしくは三人に付いて行き人里に下りて元の世界への帰還を諦めるのか。

(どちらかを選ぶ事なんて出来っこねえだろ……)

究極の選択に、恭平は頭を抱えて苦渋の表情になり、テーブルへと突っ伏す。

そんな恭平のその姿に、ソフィアとレティシアは痛々しいものを見るように目を細める。自分がもしも恭平の立場ならばと考えた上での憐れみだ。

「まだ、考える時間はありますわ。私はキョウウヘイ様がどのような選択をなされようとも出来る限り力になりますから……」

(考える時間……か……。そういえば……)

苦悩に沈んでいた恭平の頭に何かが引っかかった。それはソフィアの言った。あるセリフだ。

“魔に侵された危険な森なのです” ソフィアは確かにそう言ったのだ。ならば……

(ならば何故？ そんな危険な森に子供をつれた女性がいるんだ？)

恭平は自分の中で疑問が大きく膨らんでいくのがわかった。恭平は顔をあげて二人に向き直ると口を開いた。

「一つ、聞いてもいいですか？」

「え？ ええ。もちろんです」

ソフィアは先程まで落ち込んでいた恭平とは思えぬ様子に戸惑いを浮かべる。

「魔に侵されて危険と言っていましたか……。どうして、子供を連れだしたソフィアさん達は、その危険な森へ？」

恭平が口にした瞬間、レティシアの息を飲む音が聞こえた。その様子に気付いた恭平はレティシアの顔を見ると、眉を顰め表情を硬くしていた。

しかし、聞かれた当のソフィアは涼しい顔をして、微笑んですらいる。

「いえ……それは……」

「私達が……いえ、私と娘が逃亡者だからですわ」

レティシアがなんとか誤魔化そうとしたが、それに先んじて、ソフィアが言い放つ。

「ソフィア殿！」

「いいのです。恭平様はこれほど言い辛い事ですら、私達を信頼して話してくれたのですから、こちらも正直にお答えしなければ信義に反しますわ」

咎めるといふよりも焦りから、レティシアは少し声を荒げて止めようとするが、微笑を浮かべて首を横に振る。

「あ……いや、言い難い事なら言わなくても……」

逆に恭平は拙い事を聞いたかと思いきや、ソフィアは優しく微笑んで見せる。

「やはり優しいのですね……でも、いいんです。それに私自身が誰かに聞いて欲しかったのかもしれない」

そこで恭平はやっと気付いた。先程から口には優しい笑みを浮か

べているが、瞳には悲しい色が浮かんでいる事に。

その瞳を見た時、恭平は言おうとしていた言葉を失った。

「……私が住んでいた村はとても貧しい村でした……」

故郷を思い浮かべるように、軽く目を伏せて語りだす。

「税を納めたら村で食べる物すら事欠いていたほど貧しい村。でも、そんな貧しさの中にあっても村の人達は優しく暖かく、母一人娘一人の私たちを家族のように気遣ってくれて、とても幸せでした」

ほろつと、憂いを含んだ息を吐いた。最初は懐かしむように笑みを浮かべて語っていたソフィアの顔が曇ってゆく。

「……でも、あれは土節の終わり……村の収穫地にあった川が大雨で氾濫して、収穫地の大半を駄目にしてしまったのです」

ソフィアは表情を沈ませて、悲しげな表情を浮かべると、レティシアへと視線を向ける。

「その噂を聞きつけて、ここに居るレティシア様が私の村に訪れてくれたました」

「ソフィア殿、続きは私が……」

恭平と共に黙って聞いていたレティシアが話に割り込む形で口を開く。ここからは自分が関係する事だからだ。

「私が村の惨状を聞いたのは、唯一村に品を卸していた商人からだ。私は故あってレティシア殿に恩がある。だからこそ、その話を聞いた時はすぐさま馬を駆り、村へと向かった」

レティシアは言葉を一度止めて顔を顰める。

「聞いていたよりも、あれは酷い惨状だった……。畑は泥に塗れ、どこが畑か解らないほど、それは野仕事に無知な私が見ても、村は干上がってしまうと確信できるほどに……。そして、私はソフィア殿の元へと訪ねたのだ。村を捨てては如何かと……」

村を捨てる。恭平は実感できなかったがそれは大変な事だと言うのはわかった。

住み慣れた村から……。小さな世界から出て行くという恐ろしさが身に染みてわかる。何故ならば規模は違えど、今の恭平自身が同じような立場だからだ。

「あの……国は何もしてくれなかったのですか？」

恭平の質問に二人とも力なく首を横に振る。

「村があつたのは国の管理である王領ではなく、ジェルス子爵が治める領地なのだが、この領地には目立った特産があるわけでもなく、交易路からも遠く離れているため、村に支援する金など出せるはずもなかったのだ」

「はい……。フマロさん　村を仕切る長の方なのですが、その方が支援は無理でも税を免除してもらえないかと申し込みに行かれたのですが……。帰っては来ませんでした……」

「それは……殺さ……」

その時の事を思い出したのか。綺麗な青い瞳が涙に潤んでいるのがわかる。迂闊な事を言いかけた恭平は、その涙に最後まで言う事は出来なかった。

「わかりました。ですけど、この国では村を捨てる事が罪に問われるんですか？」

当然の疑問であり、必要な情報だった。恭平はまだ出て行くとは決めていないが、もしも、人里に出るとしても村から出ていく事が、罪に問われる法があるのだとしたら、村に住む事を避ける必要がある。だが、その質問にもソフィアは首を横に振って否定する。

「村から出ることは罪にはなりません。事実、数年に一度あるかないかですが、交流している村に嫁いでいく女の子もいました。ただ……」
「領地から出ることは許されていないのだ」

言い淀んだソフィアの代わりに、レティシアが即座に答える。
恭平はその言葉の意味がよく解らずに首を傾げた。

「領民とは領地を治める貴族にとっての財産だからな。下手に他の領地に流れぬように厳しく規制されているのだ。現に街道にある関は通行証を持たぬ者は通してくれはしない。……商人でも無い一介の村人には手に入れる方法など……」

「……だからこそ、危険を侵しても村を出たんですね」

「私は浅ましい女です……。村が存亡の縁にあるというのに、我が子の可愛さから村を捨てたのですから」

ソフィアは顔を両手で覆い、その隙間からは涙が流れ落ちる。ソフィアの涙 それは罪悪感からだ。家族同然に優しくしてくれた村人達を見捨ててしまった事への……

レティシアはソフィアの言葉にテーブルを叩いて立ち上がる。

「それは違う！ あのままソフィア殿が村に留まったとしても、村の状況は良くなりはいしない。むしろ、真っ先に口減らしの対象になっただけです！」

「そうなのでしょう。それでも……」

「駄目です！ そんな事をさせては死んでしまったゼル殿への申し訳がたたない！」

鼻息荒く、レティシアがソフィアの言葉を打ち消した。

その剣幕に恭平は声を発する事も出来ずに、レティシアも我に帰ったのか椅子に座り直して、きまりが悪く黙り込んだ。ダイニングキッチンに重苦しい空気が流れる。

「……あ……ママあ……」お……ど……お」

恭平の部屋から、シルヴィアがソフィアを呼ぶ声が聞こえてきた。その声に押し出されるようにダイニングキッチンに沈殿していた重い空気が消え失せてゆく。

「あ、も……申し訳ない……」

シルヴィアの声に、起した原因は自分にある事がわかっているのだろう。レティシアが恥ずかしそうに頭を下げる。

「そんな、レティシア様が悪いわけでは……」

空気がふわっと弛緩するのを見て、恭平は口を開く。

「夜も遅いですし、今日はこれくらいにしておきましょう。俺も少

し一人で考えたい事がありますし、ね？」

その言葉は方便だ。時計は見てはいないが恭平の体感時計は、まだ九時位だと訴えている。ただ、ここまで気まづくなつた話を続けても、意味はなく下手に藪を突くだけにしかなら無いと感じたからだ。

二人とも恭平と同じように感じて、同意を示すと涙声になったシルヴィアの声に誘われるように、ダイニングキッチンを後にする。

そして、部屋に一人きりになるとテーブルと椅子を端へと移動させて、部屋の隅に置いておいた寝袋を取り出し床に広げる。

中々に濃いさつきまでの話し合いを思い出し、深く息を吐いて緊張で固まった筋肉を簡単にほぐす。

ドアを一枚隔てた向こうからは、シルヴィアの声とそれをあやすソフィアの声が微かに聞こえてくる。

恭平は寝袋に包まらず、寝袋を敷布団代わりに上へゴロリと寝転んだ。

(元の世界を諦めるか。それとも人との関わりを諦めるか)

明かりが点いたままの天井を見上げた。両方にリスクがあり、両方にメリットがある。どちらか選べと言われても答えられるものではない。

出来れば両方と言いたいところだが、それも叶うはずもない。

「はあ……俺こんなに優柔不断だっけなあ？」

ゴロツと寝返りを打って横に姿勢を変える。

(ソフィアさんは子供の為ってのがあったとしても決断したんだよ

な……)

横を向いてみて、恭平は床に残された乾いた泥を見つめる。シルヴィアに薬を与えて容態を見ながら、心配そうにしている二人に家の中で靴は脱ぐ事を教えてから、泥の散った床を掃除した。だが、元来ズボラな性格の恭平である。床を綺麗にしたつもりでも拭き残しがあったのだ。

その泥の欠片を指で摘み。光に当てて見る。

少し苔が混じった泥は、ソフィア達の逃亡がどれほど辛いものか想像させた。

それが引き金となって、恭平に今日一日で見たソフィアの悲しげな表情とシルヴィアの苦しんでいる姿が思い浮かぶ。

こんな未発達な文明では、法はあって無きに等しい。そんな世界では人から恨まれるだけで何をされるかわかったものではないであろう。

その上で、ソフィアは決断したのだ。危険と知りつつも……

(それなのに俺って奴は…… なっさけねえなあ)

恭平は思わず溜息が漏れる。

しかし、そうは思えても、恭平にとっては他人事ではなく自分の命が掛かっている事だ。簡単に答えなど出るはずもなかった。

どんなに悩もうとも、時間は無情に過ぎ去っていくのだった。

旅立ちの決意は笑顔の為に

翌朝、ソフィアがベッドで目覚めると、二日も降り続いていた【瘴雨】はあがり、カーテンの隙間からは陽の光が差し込んでいた。

(いけない……私までベッドで寝てしまうなんて……)

一宿一飯の世話になり、拳句に自分のベッドをシルヴィアに譲ってくれた恭平を思つて、まだ眠気を引き摺っていた意識が一瞬で覚醒する。

昨夜、ソフィアは娘のシルヴィアに乞われるまま横に寝転びあやしていたのだが、旅の疲れが一気に出ていつの間にか一緒に眠っていたのだ。

「おはようございます。ソフィア殿」

すぐにベッドから降りようと身を起した時に後ろから声が掛けられた。ソフィアは床に足をつけると、声の主に挨拶を返す。

「おはようございます。レティシア様」

ソフィアの視線の先には、旅の疲れも見せない凜として立つレティシアの姿があった。

しかし、ソフィアはその姿に少しだけ違和感を感じる。
更には……

「この香り……なんでしょう?」

レティシアの方から漂ってきた、強い花のような香りに首を傾げる。

「そう、それなのですが！ 実は朝起きて水みず廁かわを借りた際に風呂がある事を聞きまして、シガ殿に許可を頂いて、その……失礼ながらお先に湯浴びをさせて頂きました」

「お風呂ですか！？」

余りの驚きに少しだけ声が大きくなる。

この世界において風呂に入れるなど、大商人か貴族階級ぐらいのものだ。平民は大概が火節には川で水を浴び、氷節は沸かした湯に布を浸して体を拭く位しかない。

ソフィアも勿論のこと風呂の事は話に聞く位で、実際に入るところか目にした事すら無い。

「いや、お恥ずかしながら久しぶりに入る風呂に長湯をしてしまいました。それに“しゃぶー”や“こんでそなー”といった、香料の入った洗粉の素晴らしさといったら……！」

レティシアには珍しく興奮した様子で、やれ湯が雨の如く降るだとか。湯が冷めないとか。この家の風呂が如何に素晴らしいかを語りだす。

ソフィアは話を聞きながら、レティシアの体を見つめる。旅の汚れでくすんでいた長い金の髪は、本来の美しさを取り戻して、更にはしつとりと湿っている。まるで、黄金の絹糸が輝きを放っているようだ。

目に見える肌も同じように風呂から出てまだ間もないのだろう。上気した肌は心なし滑らかで艶々して見える。

ソフィアも子を持つ母とはいえど女なのだ。美容に興味がないわけでは無い。

女と生まれた限り、風呂の話を聞いてからは、強い憧れを抱いていた。

はしたないと思うが、ソフィアは無意識に唾を飲み込んでいた。

「ソフィア殿も入られては如何ですか？ シガ殿が風呂は好きに入っても良いと許可をくださっておりますので……」

「……えっ！ いえ……でも……」

死の淵にあったシルヴィアの命を救ってもらって、更には一宿一飯のみならず、風呂まで馳走になるなど、余りの待遇に逆に恐れ多く感じ、ソフィアは尻込みをする。

しかし、憧れの風呂が目の前にあるという誘惑にも勝てず、揺れ動く心を表すように前に結んだ手をもじもじと忙しなく動かしていた。

そんな様子を見せるソフィアに、レティシアは口に笑みを浮かべると、いまだ落ち着かない手を取る。

「何を躊躇われるのですか。遠慮も過ぎれば不敬なのでしょう？ さあさあ、シルヴィア殿は私が責任を持って見ておりますから」

遠慮をするように躊躇うソフィアを気遣い、レティシアはこの家では、初めて楽しい笑みを浮かべると、ダイニングキッチンへと続くドアを開け放った。

女性二人がダイニングキッチンへと入ると、床に座り背中を壁に預けて眠っている恭平がいた。

その姿はソフィアが見た昨日の恭平とは全く違う人物だった。顔からは不精髭が綺麗に剃られ、黒い短髪は逆立てるように後ろへと

流している。

更に服装も薄いグレーの登山服で身を包んでいた。

昨日はゆったりとした緩いジャージ姿だったが、今の恭平はぴつたりとした登山服で、そのせいで鍛え上げられた筋肉が服の上からでもはつきりと見て取れる。

筋肉とも相まって身長一八〇センチの体が、一段と大きく見えた。初めてみる恭平のまともな姿を見てみると、ふいに恭平が俯かせていた顔を上げて、ソフィア達二人を見上げた。

「ソフィアさん、おはようございます」

「……っ！ は、はい。おはようございます。キョウヘイ様」

昨日とは見違えた恭平に、目を奪われていたソフィアが驚き、声を上擦らせて挨拶を返した。

「シガ殿。風呂をお借りしたいのだが、よろしいですか？」

「好きに使っていいですよ。使い方はわかりますよね？」

「さつき、教えてもらいましたので、なんの問題ありません」

レティシアは一時間程前に風呂に入り、ちょっと前に出てきたばかりだ。その時にシャワーの操作や、シャンプーとコンディショナーの用途も教えてある。

「それじゃ、バスタオル……体を拭く布です。それは脱衣所の横にある引き出しに入っていますので、自由に使ってください」

女に免疫が殆ど無い恭平は立ち上がって、シルヴィアの眠っているだろう自室へと移動する。流石に女性が風呂に入っている所を想像するだけで、体の一部が拙い状態になりそうだからだ。

恭平が部屋に入ると、ベッドの上ではシルヴィアが安らかに眠っ

ていた。その姿と昨日の苦しむ姿を見比べて、無意識に笑みを浮かべる。

その頭を大きな手で優しく撫でた。

「シルヴィも帰る所なくしちゃったんだよな……」

恭平は、母娘が歩むであろう人生に思いを馳せる。犯罪者の烙印を押されて、子供を連れた女性が生きていくには、並大抵の事ではない。

特に現代日本のように福祉があるわけでも無く。国も力を貸してくれる甘い世界ではないだろう。

行き着く果ては、恭平の想像を遥かに超える酷いものなのかもしれない。

恭平は頭を振って、頭に浮かんだ最悪の想像を振り払う。

(こっちの世界も甘くねえなあ……)

恭平は自分とまだ幼いシルヴィアを重ねて、大きな溜息を吐くのだった。

風呂を満喫したソフィアは風呂の気持ちよさと湯に疲れが染み抜けてゆく感覚が忘れられずに、うっとりとした息を吐きながら、横に座るシルヴィアの髪を梳かしている。

シルヴィアは気持ち良さそうに、体をソフィアに預けて大人しくしていた。

母娘の仲睦まじい姿を見て、顔は自然と笑みになる。

そこでふと思い出したように、恭平は口を開き聞いてみた。

「ソフィアさん達はいつ頃に出発を予定されているのですか？」

いきなりの質問に、ソフィアはシルヴィアの髪を梳く手を止めると、顎に手を当てて、少し考える素振りを見せる。

「……質問を質問で返すなど失礼になるのですが、その答えはキョウヘイ様が問われた意図次第で変わります。キョウヘイ様は私達がいつ頃に出発したら良いと思われませんか……？」

ソフィアは恭平に対して、暗に『自分達にどうして欲しいのか？』を問う。

それが何も持たぬソフィア達が恭平に出来るたった一つ恩返しだからだ。

もしも、恭平がソフィアの身を差し出す事を望むならば、躊躇い無くその身を差し出していたら。それ程までにソフィアは恭平に恩義を感じていた。

しかし、恭平から出た次の言葉に、肩の力が抜ける。

「出発を二日……いや、三日待つてはもらえませんか」

「それはどういふ……？」

ソフィアの怪訝そうな表情に恥ずかしげに頭を掻いて、シルヴィアを見つめる。

「昨日、寝ずに色々な事を考えてました。死んでしまった両親の墓参りはどうしようだの……友達は心配してないかだの……今思えば馬鹿みたいですね。

俺自身が異常な事になってんのに、気付いたら人の心配してるんですから……でもね？」

ああ、これが俺の生き方なんだなって思ったんです。誰かの役に

立ちたくって偽善ってやつなんだろうけど、自分で言うのもなんですけど、お人よしっつーか……」

ソフィアは恭平の本当の心に触れたような気がして、何も言わずに黙って聞き入る。恭平はソフィアの心遣いを感じて、恥ずかしそうに顔を赤くした。

「きつと寂しがりやなんでしょうね……俺は……誰かの傍で必要としてもらえないと寂しいっていうか……その……だから……こつ言うのはなんなんですけど……俺を連れて行って貰えませんか？ さんの訳にも立たてないかもしれないけど、ソフィアさん達の役に……いや、シルヴィの笑顔を守りたいと思いました。……なに、言っただって叱られちゃいそうですけど……」

恭平も自分が何を言っているのかわからなくなり、しどろもどろになりながらも、昨日の夜からずっと考えていた事を話し終わると俯いていた顔を上げた。

目の前には椅子に座っている、三人の女性達が恭平を見つめている。

ソフィアの恭平を見つめる目は優しく母性溢れる視線で、その横に座るシルヴィアは何の話かわからずにキョトンとしていた。

椅子の背凭れに寄りかかって、目を閉じていた筈のレイシアは無表情にジッと恭平を見つめて、まるで真意を押し量っているようだ。

（はぁ……、駄目だよな……、怪しさ満載だろ。これじゃ……昨日、初めて会った人間にこんな事を言われたら俺でも疑うわ）

自分の言葉を思い返し気まづくなって『さっきの話はやっぱ無しで！』と言おうと思った時に、ソフィアが微笑みを湛えて口を開い

た。

「昨夜も申しましたが、私達 母娘は逃亡者の身です……。それに付いて来られると言う事は、キョウヘイ様も巻き込まれる事になるのですよ。それでもよろしいのですか？」

穏やかな口調で言うソフィアの言葉に、恭平は即断できずに黙り込んでしまった。

ソフィア達は逃亡者だったという事を忘れていた恭平は、無意識で付いて行くメリットとデメリットを計算している事に気付いて、自分の頭を殴りつける。いきなりなその行動に三人はびっくりして目を見開いた。

「か……構いません！ それに俺の世界ではソフィアさん達の行動は他の国に行く場合を除いて違法じゃない。だから、俺の中でも違法じゃないです」

我ながら無茶苦茶な理屈だと、恭平は思う。だが無理矢理にでも言わないと、また怖気づいてしまいそうになると考えたからだ。

いきなり、ソフィアはコロコロと少女の様に笑い出した。レティシアも目だけが笑っている。

「シガ殿、貴公は本当にお人好しなのだな？ だが……私は好ましく思います」

「ふふっ……これからもどうぞよろしくお願い致しますね。キョウヘイ様」

ソフィアは笑顔で手を恭平の前に差し出した。それを呆然とした目で、恭平は見つめる。

「ねえねえ、ママあ。キヨウも一緒にお出かけするの？」

シルヴィアにとって大半の話が理解不能だったが、ソフィアの雰囲気や手を差し出した意味を自分なりに理解して、疑問の声をあげたのだ。

見上げてくるシルヴィアの頭を、ソフィアはそつと撫でると頷いてみせる。

「そうよ。シルヴィは恭平様と一緒に出かけするのは嫌かしら？」
「キヨウと一緒に出かけするー！ お出かけー！」

シルヴィアの明るく元気な声に、恭平は我に帰ってシルヴィアを見つめる。

その無邪気な様子をみた恭平の心に暖かい気持ちが生じた。湧いた胸の温もりは頭にあった陰湿な不安を薄れさせ、そして、シルヴィアの笑顔が不安を全て塗り替えてくれる。

恭平は小さく息を吐くと、いまだ差し出されている。ソフィアの華奢な手を握るのだった。

記憶の淵 思い出した記憶

「それではシガ殿、準備はよろしいか？」

「はい！ 大丈夫です」

旅についてゆく事に了承を貰ってから三日目の早朝だ。

今、この家にいる全員が旅の準備を済ませて、玄関に集合している。

「しかし……、本当に大丈夫なのか？ それは……」

レティシアは呆れたように、恭平が背中に背負った荷物を見つめる。

それもそうだろう。登山リュックが大きく膨らみ、その下には一リットルと二リットルの折り畳み式ポリタンクが止め具によって、ぶら下げられているのだ。

その合計重量は七〇キロ近くにもなる。

旅先で最も必要とされるもの、それは水だ。飲み水はもちろんの事、傷口を洗い流したり、料理に使ったりと使い方は多くあるし、いくらあっても困るものではない。

だが、問題は重量よりもその性質にある。一リットルで一キロなのは当たり前だが、性質上で水は所持者の動きに反する動きをする。右に体を動かせば左に動き、左に体を動かせば右へと移動する。その負担は純粹に重さだけでなく、体に掛かる負担までも増加させるのだ。

リュックの中身が膨らんでいるのは、登山の時に持っていく装備に携帯食料、それとこの国で売り物になりそうな物が入っていた。

地球からこの世界に飛ばされてきた恭平は当然の如く、この世界の通貨など持っていないし、日本の紙幣など紙屑にしかならない。

美術的価値としてみれば、透かしは目立ちすぎる。

悩んだ恭平が出した答えは、この世界で目立たない程度に高価なものを売る、である。

もちろん“目立たないように”とは、ソフィア達が逃亡者である事を踏まえての判断だ。

追っ手が無いとは限らないのだ。レイシアもそこは神経質なまでに注意を払っているらしく、この森に入るまでも極力は旅人に会わないよう街道を外れてきた。

森を抜けた先からは王領に入るらしいので大丈夫だろうとは言っていたが、万が一を考えて、珍しい物は外して選んだ。

一つはバーベキュー用に買った粒胡椒と数着の衣服。それと高濃度の塩水に浸して乾かした【汗布】と呼ばれている塩布である。

汗布とは基本、塩の売買を国が取り仕切っている為に、塩商人と呼ばれる国から認可を受けた商人だけにしか、塩を売買してはならないと決まっている。

だから、庶民には高すぎる塩味を安く売買する為に編み出された方法だ。

塩は売ってはならないが、汗が染み付いた布を売ってはならぬという決まりは無いと、なんとも揚げ足取りな言い分なのだが、国も商人達も暗黙の了解で黙認している。

これを途中の村で売り、この国の通貨が若しくは物々交換で別のものへと変えるのだ。

基本的に村では通貨は使えず、物々交換が主流で街の商会で物を売り、この国の通貨へと換わる。ややこしくは感じるが、村に住む者にとって通貨とは商人との取引に使うものであり、村内でのやり取りは大抵が物々交換で事が足りるのだとか。

レイシアがそう説明した後で、恭平に通貨を見せたが、その数

に驚いた。

この国の銀貨だけで五種類、銅貨は三種類、金貨はレティシアは持っていないらしいが、それでも八種類の金貨が存在しているのだとか。

それもこれも通貨の銀含有量を切り上げたり、切り下げたりする度に、『いついつの銀貨の方が質がいい』となっている為に種類がこんなにあるそうだが……物の売り買いをする時は騙されないように注意しろと促された。

正直、恭平はその説明を受けただけで騙されない自信が無くなったのは余談だ。

それらが詰まったりリュックを担ぐと、肩にずっしりとした重みが押し掛かる。

試しに何度か足踏みを試みるが、バランスを考えて物を詰めた為に歩き難くはあるが普通に歩く事は出来そうだった。

一応、化け物に襲われて逃げる際には荷物を捨てられるように、腰と太ももにベルトで固定するレッグポーチに粒胡椒と携帯食料、氷砂糖を入れて、小型の水筒に水も入れてある。

あくまで最悪の事態に備えてだが、登山服の上には登山に使う多目的ベストを着て、熊スプレーや火起し用の小型バーナーも完備してある。準備万端だった。

恭平は慎重すぎるかもとは思ったが、何かあるのかわからない未知の世界に旅立つのだ。何かあってから後悔しては遅いと思ったのだ。

その脳裏にあったのは二回目に外へ出た時の光景だ。家が消えてしまい散々後悔した事を恭平は未だに忘れられない。

あの時に見た化け物の牙を思い出して、小さく身震いする。

それを勘違いしたソフィアが笑顔を、恭平へと向けた。

「大丈夫ですよ。いざとなれば私もお荷物をお持ちいたしますから」

笑顔でそう言うと『力は割とあるんですよ？』と、ソフィアが力こぶを作る仕草をする。

その足にしがみ付いていたシルヴィアも、恭平の足を引っ張った。

「シルヴィも！ シルヴィもキョウのお手伝いするよあ？」

小首を傾げながら言ってくれた言葉に、恭平は笑みを浮かべて、その大きな手で頭を撫でた。

「シルヴィは笑ってくれているだけで力になってるから……。けど、そんな時は頼むな？」

「うん！」

シルヴィアは気持ち良さそうに目を細めながら、大きく頷いて見せた。

（さて……出発か……この家がまた消えたりしなければいいけど……消えたら消えたで、また別の可能性が残る……か？）

恭平は電気が消された家の中を見回して、深く息を吐いた。

家が消えた理由についてはいくつか考えたが、どれも試す勇氣はなかった。出発までは何もしてこれなかった。

家があの時だけ、偶々元の世界に戻ったのか。もしくはあれは夢か幻だったのではないか。

最後のこれは希望的観測でしかなく、自分でも荒唐無稽な推論だと思う。この家の存在は自分の意思によって現れたり、消えたりする魔法の家ではないのかなど、どれもが試す事が出来ないものであった。

もしも、試してみて家がそのままならば、まだマシだろう。だが、

消えたら？　そして、二度と現れる事がなかったとしたら？　恭平はそう考えるとそんな事になった場合に備えてからしか試す事ができなかつたのだ。

「魔の森を抜けるまで、後三日ほど掛かる。強行軍になると思うが、皆も気を抜かぬようにしてほしい」

「ちょっと、待ってもらえますか？」

レティシアは怪訝な表情で、恭平を見つめる。

「何か？　忘れ物でも？」

「いえ、昨夜話した事です。もしかしたら俺が家を離れた時に家が消えるかどうか確かめてみたいんです。だから、みんな外に出た後は黙って見といてもらえますか？」

「その話が……流石にそんな事は信じられんが……わかった。目の前でもし消えたら信じぬ訳にもいかんからな。ソフィア殿もシルヴィア殿もよろしいか？」

レティシアの問い掛けにソフィアは頷いて答えて、シルヴィアはよくわかっていないようだ。

「では、出発だ！」

皆を引き締めるためにわざと大きな声で喝を入れると、外へと続く玄関を開け放った。

そこは相変わらずの密林が広がり、雨が降ったせいかいつもより茂っている気がする。

透明な壁　結界の中から外を観察するレティシア。魔の森に巣食う化け物は基本的には夜行性で、空腹時しか昼間は行動しない。

だが、だからと言って油断する訳にはいかなかった。普段は【魔瘴】が薄い、この場所にも空腹から強力な化け物が出る事があるからだ。

恭平は以前にあつた化け物の事を質問した時に聞いたのだが、化け物は総称で【理喰】と呼ばれ、強力な【理喰】以外は個体名や種族名が付いていない。

通称でなら、【二足】【四足】【八足】【鱗】などと外見特徴だけを名称として使っらしいが、これと決まったものは無いという。

結界内から、レテイシアが周囲の安全を確認した後に、腰に吊るした皮袋から木の棒を取り出して、それを半ばからへし折る。

すると、なんとも言えない様な香りが玄関に広がり、棒の中からジワリと粘性の樹液のような物が染み出してきた。

そして、半分を自身の背囊についている。小さな袋に仕舞うと残り半分を、恭平に差し出してくる。

これは、恭平もあらかじめ説明を受けていた。光木と呼ばれる魔が嫌う匂いを放つ魔除けだ。

その魔除けの棒を、ソフィアから預かった匂い袋に入れる。こうしておく匂いが持続して、一日程度ならば弱い【理喰】は寄ってこない。

レテイシアが視線で問いかけて、恭平は大きく頷いて返す。

今、レテイシアが持っているのは、折れてしまった剣ではなく。

恭平が持っていたマシエツトを借りている。

剣は残念ながら、三分の一ほどを残して折れてしまっているために、短剣ほどこしか長さがないのだ。仕方が無く恭平のマシエツトを借りている。

それに対して、恭平は熊避けのカプサイシンと言う唐辛子成分が入ったスプレーを、いつでも抜けるようにしている。

登山用の杖は、邪魔になる事と長距離を歩く事を考えて、ソフィ

アとシルヴィアに貸し与えた。

レティシアが外へと飛び出すと、使用済み光木を砕いた粉を周囲に撒き散らす。

こつする事で周囲の【魔瘴】と呼ばれる。空気や土に染み込んだ理を侵すものを一時的に薄れさせ、安全地帯を作るのだ。

恭平が次に飛び出して、油断無く周囲を見張る。主に不自然に動く茂みや木々を見るぐらいしかできないがいないよりはマシである。続け様にソフィア達母娘が外へと飛び出してきた。

三人を確認した恭平は、三人に向けて家から離れるように手で指示する。

それに対して、レティシアは真剣な顔で頷き、ソフィアもシルヴィアの手を引いて、家から少し離れた。

そして、家が消えたと気付いた辺りまで、見逃さぬよう見据えたまま下がる。

前回の所より、少し手前五メートルあたりまで来た時に、家に変化が起きた。

それは見た事も無いような幻想的な光景だった。

玄関の入り口を前とするならば、家の後ろ……丁度ベランダ付近から光の粒子が上がり初め、それは瞬く間に玄関付近まで広がってゆく。

光は空にフワリと浮くと空気に溶け込まれるように消えて、最後には前回と同様に何も無い更地だけが残されていた。

「ママあ！ お家がキラキラあつて消えちゃったあ……」

「そんな……なんだ！ これは！？ ソフィア殿！」

「こ……こんな事が……こんな話は聞いた事ありませんわ……恭平様は！？」

二人が慌てて、少し離れた恭平へと視線を向けると、そこには呆然と佇む恭平の姿があり、ソフィアはホッと安堵の溜息を漏らした。しかし、その様子が二人から見ても、どうにもおかしかった。

家が目の前で消えてしまった事に呆然としているのかとも思ったが、それはどうも違ってしているようだ。恭平が呆然と眺めていたもの、それは家があった場所ではなく、恭介を見つめる二人……正確には三人の方だったからだ。

『……なんで、皆が何を言っているかわからないんだ……？』

恭平には、先程三人が上げた驚きの声が何を言っているのかわからなかった。

わからないと言うか、恭平が理解出来ない言語だったというべきだろう。

様子のおかしい恭平を心配して、ソフィア達が寄ってくる。

「恭平様。大丈夫ですか？」

「どうしたのだ？ まさか、体に変調でも！？」

「キョウウ？ だいじょうぶう？」

三人が寄って集って、恭平に質問をするが、そのどれもが恭平に見れば、生まれて初めて聞く英語のように聞こえる。

『あー……みんなが何を言ってるのか。俺にはわからねえ。くそっ！ どうなってるんだ！』

三人は恭平の言葉を聞いて愕然とした。

まさか、悪ふざけでこんな事をする人間では無いと、レティシアとソフィアはわかるだけに、言葉が通じていない事がわかる。

しかし、現に自分達の言葉がわかっていないようで、更には恭平の言葉も全く聞いた事もない言語で話しているのだ。

(なんだ？ 何故急に？ ……まさかっ！)

どうしていいかわからず、オロオロとしているソフィア達にジェスチャーで待つてくれるようお願いしてから、慌てて家のあった場所まで移動する。

『思い出せ！ 思い出せ！ あの時の事を、どうやった？ どうやったたら家が現れた？』

記憶の底に仕舞い込んだ恐怖の記憶を浮き上がらせるように、必死で額を拳で小刻みに叩き、
思い出そうとする。だが、肝心な家が出てくるところが思い出せない。

(あの【理喰】が現れて、んで、死を覚悟して……俺は何をした！
なんで、いきなり家の中にまで記憶が飛んでやがるっ！ くそっ！
ポンコツ頭が！)

いくら思い出そうとしても肝心な部分がモヤがかかったように思い出せずに、焦りが募る。

『家！ そうだ。家出て来い！ 家カモン！ 家ウェルカム！
家よ来い！』

周囲には、ソフィア達三人がわからない言語だけが響き。それでも何も起きない。

(あー！ くそっ！ 覚悟を決めて出てきたばっかなのに、早速帰りたくなるのかよ！)

『ボロマンシヨンの家。帰らせろってんだ！』

その言葉の途中、家という単語に反応したように目の前が前回と同じように光り輝き、瞳を焼く光が収まった時には飾りつけのない玄関扉があった。

(は……ははっ……、最初に家つった時に出てこいよ……クソ家が！)

恭平は心の中で毒づきながら、玄関のノブに手を伸ばすと、カチヤリと音がして、開いていくドアに安堵が広がってゆく。中はいつもと変わらぬ恭平の自宅だった。

玄関に入ると、背中荷物を一度下ろして、後ろを振り返って、三人を見ると、今度は三人がいきなり現れた家に呆然としていた。恭平は三人に向かって、大きく手招きをするとシルヴィアが駆け寄ってくる。

シルヴィアに連れられるように、ソフィアとレティシアが恐る恐るやってきた。三人を家に招きいれる。

「ど……どういふことなのだ……？」

「どうもこともないですよ。まさか、外に出ると言葉が通じなくなるなんて思いも寄りませんでしたよ。俺は……」

レティシアは恭平の答えた言葉に驚いた顔を浮かべて、顔を凝視してくる。

「し……シガ殿……言葉が通じるのか!？」

「……のようですね。家の中だけなんて不便この上ないですけど……」

「はああ……よかったですわ。一時はどうなる事かと心配になりましたもの……」

「キヨウ。変だったよ？ バージャエサイイエアピルフォとか言っていたの。あれ、なあに？」

色々と頭に浮かんだ疑問を考えてながら、受け答えをしていた恭平は、シルヴィアの言葉にギョツとする。

(そんな変な言葉に聞こえたのか……バージャエ……なんだっけ？
まあ、いいけどさ)

シルヴィアの視点から見た自分を想像して、恭平は溜息を漏らす。

「んん……それはともかく困りましたね？ これでは会話ができませんもの……」

「そうだな。家の中だけとは……そうだ！ ソフィア殿。この家が消えたり現れたりする際に奇妙な感じを受けませんでしたか!？」

「え？ ええ……恐らくあれは理の歪みですわ。こんな物を作り出す異能など聞いた事ありませんけれども……」

レティシアが感じた違和感を話すと、ソフィアはしばし考えた後で聞きなれない言葉を口にする。

「ちょ……ちょっと待ってください！ 異能ってなんですか!？」

「ええ、少し長くなりますけれど、よろしいですか？」

「は……はいはい！ お願いします!！」

声を上擦らせながら、何度も頭を縦に降る。
そんな、恭平にソフィアは語りだした。

「異能とはこの世界の人間が持つ力の一つですわ。」

一つは己の理力を使い、外の理を曲げる。神理術というもので、これは個人で大小の差があれどほぼ誰にでも仕える力です。

次に魔術……これは魔を信望して内に【魔瘴】を宿らせたものですわ。非常に危険で最もこの世界の人間が使ってはならない力です。

最後に異能……これは一概にどういうものかはほとんどわかってはいません。ただ、わかっていることは、極稀に持つ人間がいる。次にその能力は個人差や血筋で決まるのではないかと言うこと、最後に神理術とは違い、理そのもの歪ませると言う事だけです……。国によっては『魔王の欠片』とも『神の祝福』とも呼ばれている大変珍しいものとしか……」

「どうして、俺のが異能だとわかったんですか？ ……それと理を歪ませるとは？」

恭平は話を聞きながら、疑問に思ったことを口にする。

「力が使われる瞬間に、理が歪む力が感じられるからですわ。それと理を歪ませるとは……その在り様を変化させると言った方がいいかもしれません。例えば、火に触れば熱く焼け爛れてしまいますよね？」

「そりゃそうでしょう？」

「それが理です。神が定めたそう在るべきもの……『火に触れば熱く火傷をする』という理が歪められれば、異能者にとつて『火とは触れると冷たく傷が癒える』という物に変わってしまうのですよ」

ソフィアの説明では他に異能として、農家が植物の成長を促したりだとか、鍛冶屋が絶対に修理できないと思われる武具などを修理できたりするのだという。

「俺の異能がこの部屋を生み出すことなんですか？」

「生み出すのが、シガ殿の能力か……それとも家をどこかに移動させているのか？ あ、移動は少し違つか食材が元に戻ったりが説明つかん……」

腕を組みながらあれでもないこれでもないと思わすレティシアを他所に、恭介は自分の手を見つめて開いたり、閉じたりしてみる。

「ははっ……なんか、テレビに出てくる超の……あ……」

恭平はふとあることに気が付いた。それはまだ一ヶ月と経っていない前の、まだ地球にいた最後の記憶……今までどうして思い出さなかったのかと不思議にすら思う。

『これからテレビを見ている方の所へ電波を通じてパワーを送り、テレビの前の皆さんに奇跡をお見せします！』

おぼろげな記憶の底から湧き上がる。掠れた通訳の声……

（地球では……異能とは何を指していた？ ……超能力……エスパ
ー）

テレビに映るイケメン超能力者の顔が、恭平の脳裏に蘇った。

(俺は……俺は……理由無く飛んだんじゃなく……“飛ばされた”
ってのか?)

ソフィアが何かを言っていたが、恭平には届いてはいなかった。

待ち受ける黒い影

「はい！ キョウウにこれあげよう！」

シルヴィアが顔に笑顔を浮かべて、大振りのリンゴみたいな赤い果実を差し出してくる。

恭平はそれを笑顔で受け取ると、首を傾げながら口に入れる素振りをした。

視線だけでソフィアを見つめる。コクリと小さく頷くのが見えたので、一口で齧り付く。

酸っぱいながらも仄かに漂う甘みが口の中に広がる。大きなスモモか柘榴のような味に、一瞬顔を顰めそうになるがそれを堪えて、シルヴィアに笑顔を向けた。

恭平の様子にシルヴィアは機嫌が良さそうに、ソフィアと顔を見合せて飛び跳ねて喜ぶ。

ピコの実というこの赤い実は、シルヴィアの大好物らしく森の深いところでは取れないので見つけた時は大はしゃぎであった。

魔の森と呼ばれる密林を抜けると、恭平が拍子抜けするほど、どこにもある普通の森が広がっていた。

温度や湿度も魔の森だけのものらしく、森に入ると別世界のようだった。纏わり付いていた空気は軽くなり、温度も森の中だけあって夏の気候でも涼しく感じる。

あれから三日が経って、本来なら三日は掛かる行程を二日で踏破する事が出来た。それもこれも、すべては恭平の異能力である。家の召喚があればこそだ。

(はあ……結局は何も変わらず、か)

言葉が通じないという衝撃の事実と、自分がここに来たきっかけかもしれない超能力者の事を思い出してから三日だ。

あれから、パソコンで色々調べてみたのだが、不思議な事にある日見た番組にもそんな超能力者は出ておらず、何も情報が得られはしなかった。

キーワードを変え、検索サイトも変えて調べてみても、あの超能力者の(ち)の字も出てはこないのだ。

少し前の恭平ならばショックで二、三日は塞ぎこんでいたかもしれない。だが、今の恭平にはそんな時間も余裕もなかった事が功を奏した。

言葉の問題と家の事、そして、何よりパソコンに向かっている間も心配そうな表情を浮かべていた三人の仲間がいた。

恭平は無理矢理にでも引き攣った笑顔を浮かべて、振り返った後で三人と話し合った。

言葉の問題は簡単ではなかったが、当面はどうにかなった。

レテイシアの意見で必要な言葉だけをとりあえず覚えておいて、魔の森を抜けてから本格的に覚えればいいと言われたのだ。

確かにいくつかの単語だけならば、そう時間は掛からずに覚える事はできた。それでも丸一日を費やす羽目になったのだが……

次に家の問題は周囲の状況を確認しながら、場所を変えたり言葉を変えたりと実験をする事で、色々確認する事も出来た。

家を出現させる条件は二つ、“家”というキーワードと、その際に“家に帰る”という意識を持つことである。

そして嬉しい事もわかった。【二足】と呼ばれる。恭平に襲い掛かるうとした化け物に、持ち去られたと思っていたピッケルが、登山用具入れに戻っていたのだ。

家の様子が少し違った事に違和感を感じて、恭平が色々調べた結果だ。

同様に悪い事が、今の段階でわかった事は嬉しい誤算だった。

それはレティシアやソフィアの持っていた荷物を家に置いてから家の実験を行った時だ。

消した後で見ると、家があった場所に二人の荷物だけがポツンと残されていたのだ。

それは何度やっても同じだった。クローゼットや冷蔵庫に仕舞おうがである。

恭平はわかった事を紙にまとめてみると、腑には落ちないが納得は出来た。

人の荷物を部屋に保存して、一緒に消す事はできない。

家は玄関から後ろに向かって伸びるように現れるために障害物がある場合は、その障害物を跳ね飛ばして出現する。

家の中では言語が違っても意思の疎通が可能である。ただし、動物は不明。

もっとも意味がわからないのが、家は一度消して出現させると、恭平が異世界に飛んできた時の状態まで、リセットされるというものだ。

これはわかった事をパソコンで纏めようとした時に気付いた事だった。

消したはずのウィンドウやタブが、元の状態にもどっていたのだ。それでまさかと思い、こちらでクリアしたはずのゲームデータを見てみたら案の定、全て消えてゲームソフトは未使用の状態になっていた。

まさにキツネに化かされたような気分とはこの事だと、恭平は啞然とするしかなかった。

色々問題は多く存在しているが、少なくとも衣食住の問題はこ

れで解決したと思うと、恭平の心は軽くなる。

(……一番の問題は解決の糸口ですら、掴めないままだけど……当初の頃を考えるとまだマシだよな?)

そう思わないとやってられないのが実情だが、魔の森という危険地帯から逃れられたのは、大きな進展だと言えよう。

恭平はひとしきり思考に浸ると、左手に意識を向ける。

左手には小さく暖かな手が握られ、その先には自分の身長のおよそ半分の人物、シルヴィアが時折、腐葉土に足を取られながら歩いている。

シルヴィアは子供ながらも、恭平に言葉が通じない事がわかったのか、用がある時以外は話し掛けようとはしてこない。

だからといって嫌われた訳ではない。恭平がこうして意識を向けていると、その顔を見上げては嬉しそうに笑顔を向け、手を引っ張って遊ぶ様子でわかる。

そうして歩いて行くうちに、日が暮れて周囲が薄暗くなってきた。レイシアが適当に開けた場所で、恭平に向かって指で三角をなぞる。

あらかじめ決めておいた野営の合図だ。

恭平は三人の前に歩み出ると、正面に手を翳す。

『家に帰る』

その一言だけで目の前の空間に光が満ちてゆき、光が収まると家が出現している。

ここ数日間何度かやった事だ。恭平の後ろにいる三人も慣れてしまっただけ、もう驚きもしない。

玄関の扉を開いて、三人に向かって手招きをした。

「ソフィアさんとシルヴィとレティシアさんおかえりなさい」

恭平は三人の名前を出して、迎えの言葉を送る。

これもわかった事の一つだ。こうやって声をかけると例え相手に触れなくても、結界の中へと迎え入れる事が出来る。

恭平にとって最大の謎で永遠に解けそうにないのは、この家なのかもしれない。

食事を済ませて食後のお茶を啜っていると、レティシアが口を開いた。

「明日にはこの森 シヴォルトの森を抜けて、今は王領であるシグルド領へと入るのだが……」

レティシアは手元の紅茶に視線を落として呟く。

「何か問題でも？」

「……あの事ですね……」

「ええ……ソフィア殿は信じて居られるかと思いますが、私にはどうも……。シガ殿……。ソフィア殿達が村から逃亡したというのは知っているだろう。村にはな？ 村人の出生やら移住、更には没者を載せる人頭帳と言うものがあるのだ」

「そんなのがあるんですか？ それが何か問題でも？」

その言葉に、レティシアは顔を歪める。恭平は聞いてはいたが、人が領主にとっての物なのだという事をすっかり忘れてしまって

いた。人権意識の高い日本人としての弊害だ。

紅茶を一口啜り、レティシアは人頭帳の意味と役割を話す為に口を開く。

「人頭帳とは村の長が村人の人数を常に書き記し、人頭税を払う際に使われる物だ。それは代々村の長を務める者が管理するのだが……。村長のフマロ殿は嘆願に向かい帰らぬ方となられた。順当に行けば息子のラズロ殿が村長を務められるのだが……その人が、な？」

「問題のある人物だと？」

恭平がそう言うとソフィアは顔を俯かせて、レティシアはゆっくりとだが頷いてみせた。

「フマロ殿は信の置ける方ではあったのだが、息子のラズロ殿は気弱でとても村を纏められるような人物には感じられなかった。一応はソフィア殿とシルヴィア殿を数日前に没者となった旨を記載してくれるように頼んだのだが……おそらくは……」

人がどこにもぶつけようの無い強い怒りを感じた時に、ぶつける場所がなければどうするか……。

つまり、この場合は災害によって潰された田畑の怒りはどこにぶつけられるのか？ 決まっている。村の一大事に逃げ出した、ソフィア達母娘に向かう事は必然だ。

例えば母娘の食い扶持が減った分だけ、村の食糧事情が少しだけ助かるという事実があったとしても、人の怒りは時に理不尽なものなのだ。

そうなればいくら村長でも……しかも、人望も何も持っていない新しい気弱な村長ならば、尚のこと怒りの矛先をソフィア達に向けるよう仕向けるに違いない。

当然ながら、領主にも関抜けの事が伝わるだろう。

この世界では母娘二人ぐらい、と行って見逃すほど甘くはない。何故ならば前例を許してしまうと、ダムに空いた穴のように脱領者はその広がりを見せて、ついには決壊してしまうのが目に見えるからだ。

「領主に知らせが入り、準備をして早くて村へと確認するのに二日……遅くても三日までには徴税官を向かわせるだろう。村の者に逃げた先を聞いて、シグルド領に抜ける事を想像する事はそう難しくは無い。」

領主に知らせ、兵を率いて森を迂回するように街道を使い、内密にシグルド領へと兵を配置する。これに十日〜十二日ほど……我々がここに来るまでに使ったのが十六日……」

「……待ち伏せされている？」

「バレぬように配置できる兵など、たかがしれているだろう。恐らくは北の王都に向かう街道と南の交易街に向かう街道を、変装した者達が見張っているかもしれぬ。……いや、間違いなく見張っているだろう。途中にある村も同様だろうな……」

（俺のせいか……。俺がもつと早くに決断をして、外に出る勇氣さえあれば？ 準備なんて悠長な事をせずに出ていけば……いや、家の事を試してさえいれば、四日は短縮できたはずだ）

領主が事の次第を知り、待ち伏せまでに掛かる時間が多くて十五日ほど、そして一行が使ったのが十六日……。確かに恭平が準備などせず即断即行動をしていれば、三日は早くに着いているはずだった。待ち伏せが成される前にだ。

しかし恭平とシルヴィアを除く二人は、仕方が無い事とわかっていたので責めたりはしない。何の準備もせずに魔の森を進むのは、勇氣を通り越して無謀であると知っているからだ。

恭平とてわかっているつもりだった。だが、それと納得できるか

という問題は別である。

恭平は自分の臆病さに齒噛みする。

「……大丈夫です……最悪は私の身柄さえ差し出せば、領主様の兵達も引き下がるでしょう。あえて子供にまで罰を及ぼそうとはしないはず……見せしめは一人で十分なので……」

「なりません！」

「それは駄目だ！」

ソフィアは諦観の籠った表情で、シルヴィアの頭を撫でながら呟く。

その呟きに、恭平とレティシアは同時に声を荒げた。ソフィアとシルヴィアは驚いて二人の顔を見つめる。

その目には紅茶のカップを握り潰したレティシアと、椅子から腰を浮かせてソフィアへと身を乗り出している恭平の姿が映った。

「い……いや、大丈夫！ 大丈夫だから。最悪の時はこの家を出して籠ればいいんだよ。外からは見えないようにして、さ？ 兵士達はいつまでも他の領地に居る事が難しいんだろ。だったら、いざとなれば、一ヶ月ぐらいこの家に籠城すればあいつらも諦めるさ！」
「それはいい考えだ！ そうすれば奴等とて自領の恥を晒す訳にはいかないだろうし、万が一だが、その方法ならば無事に切り抜けられよう！ だから、ソフィア殿が犠牲になられる必要などはない。シルヴィア殿の事を考えられるのならば、御自愛してください！」

二人の息を切らせぬ説得に、ソフィアの目から大粒の涙が零れだす。

「あ……ありがとうございます……とつござい、ます……恭平様、レティシア様……」

恭平はソフィアの涙を見て、慌てふためいて立ち上がる。

レイシアはティッシュを取りに部屋へと走った恭平とは対照的に、全身の力が抜け、手の中で砕けたカップの破片をテーブルにそっと置いた。

その破片を眺めながら、レイシアは恭平に謝らねばと漠然と思うも、カップの持ち主である恭平は、涙を拭くにはティッシュがいいかハンカチがいいかと迷って、タンスの前でオロオロとしているのだった。

影を避けて、日差しの中へ

鳥が奇妙な声をあげて、木立から飛び立ってゆく。

周囲は朝も早いせいかわ、まだ薄暗く不気味に感じる。

しかし、日が暮れるまでに魔の森を出たいため、これぐらいの早さが丁度よかったのだ。

「それでは行くか？」

「はい……こんなに長くつき合わせてしまって、本当に申し訳ありません……」

「いや、最後まで付き合おうと言ったのは、私です。それにシガ殿のお陰で皮肉にも、今までに無い位に快適でしたから」

申し訳なさそうに謝るソフィアに、レティシアは苦笑を浮かべて家を振り返る。

そこには、シルヴィアと手を繋いだ恭平が玄関から出てくる所だった。

「待たせた。私、行く。ごめんなさい。です」

「キョウ上手い上手い！」

「感謝。シルヴィ、お陰。先生、です」

玄関から出てきた恭平は、意外な事に片言ながらも会話する事が出来ていた。

今、恭平達一行がいるのは、魔の森と普通の森、その中間といったところだ。

あれから、恭平達は魔の森に戻っていた。

理由は、レティシアが、兵が偽装を行って街道を見張っていた

としても、資金などの関係上で七日以上は他領に留まる事は難しいだろうとの判断があったからだ。よって、恭平達は無用な争いやトラブルを防ぐ為に、そして万が一にでも森の搜索をされても大丈夫な様に、魔の森に戻る事に決めた。

普通の人間ならば魔の森に長期間居る事が不可能なので、魔の森には搜索の手は伸びないだろうと考えたのだ。

予想と違って、領主の兵は街道沿いの村々に十日近くも滞在していた。逃亡者を探しているにしては頑張った方だが、逆を返せばそれだけ領地経営が上手くいっていないという証明でもある。

それともう一つの理由としては、恭平の言葉に問題があった。

今はいいとしても、街に着けばどうしても言葉を覚えなければならぬ。ならば、今のうちに覚えておいた方がいい……と、毎日シルヴィアと遊び感覚で勉強を行った。玄関の壁を行ったり来たりを繰り返して、言葉を覚えていったのだ。

たった十五日程度では、多少覚えても単語を片言で話すのが精一杯である。

それでも外大に行っていただけあって、言葉のコツを掴むのだけは早かった。

文字に関しては、書ける人間がレイシアだけだった為に覚えてはいない。今後は言葉と共に文字を覚える事が課題である。

「昨日も言ったが兵は引いたとはいえ、油断は出来ん。私が知る限り村の何人かに金を握らせていたようだからな？」

顔が割れていないレイシアが様子見のため単独で村へと赴き、帰ってきたのは昨日だった。

恐らくレイシアは、ここ数日はまともに休んではいないだろう。にもかかわらず、翌日には出発が出来る辺り、体力の底が知れない。

「ええ。わかりました。注意致します」

ソフィアだけから返事が返ってくる。シルヴィアと恭平は返事が出来なかった。シルヴィアは話が難しかった為に解らず、恭平はまだこの世界の言葉を単語でしか聞き取れないので話が見えなかったのだ。

二人は顔を見合わせて訝しげな表情を浮かべあった。

それから途中で何度か家を出して野営をしたが【理喰】に襲われる事も無く、旅は順調に進み三日目には、恭平達は街道を歩いていた。

今が火節 夏も真つ盛りの為に、森の中とは随分違った。平原に敷かれた街道は、遠慮のない強い陽射しに晒され、そこを旅する者達を容赦なく焼いてくる。

レティシアが村で買ってきてくれた夏用のフードマントを被り、陽射しから肌を守るが暑さまで防いでくれる訳ではない。街道を進む恭平達は、すっかりと暑さに参っていた。

ここ数日が暑さのピークで、後は少しずつ陽射しも和らいでいくだろう。とレティシアは言っていたが、恭平はそんなに早く暑さが和らぐとは感じられなかった。

時折、風は吹くがこう暑くては熱風のように熱を持ち、涼しいどころか暑さが増す勢いだ。

「キョウウ……水飲んでいい？」

「もう……シルヴィ……さっき飲んだばかりでしょう」

「でもお……」

恭平は屈んで、魔法瓶からよく冷えた水をコップへと注ぐ。塩と

砂糖、さらに調味料用のレモンを入れた水を一口分だけ入れると、シルヴィアに飲ませた。

こういう暑さで喉が渴いた場合は、脱水症状にならないように適度な水分が必要だ。過度な水分は体力を奪い、余計に喉が渴く事になる。なので、一口に含むぐらいの水を短い間隔で取った方が結果的には効率よく水分補給ができるのだ。

そうは言っても、シルヴィアはまだ子供である。

この暑さに参るのは誰よりも早かった。

さらには数日前までは快適な家暮らしだったのだから、より過酷さが身に堪える事だろう。

明日には最初の村に到着予定なのだが、それまでは水も節約せねばならない。

恭平は最悪の場合、家を出しての補給と休憩を考えてはいたが、こんな街道で家を出せば目立つことが確実だ。

(何か方法を考えないと……)

食料はバーベキュー用の肉を干し肉にする事で余裕はあるが、水はかなり心もとなくなってきた。

レティシアの持っていた水を入れる皮袋も、まだ暑さが酷くない内に村まで抜ける計算で詰めていた。恭平が持っている三〇リットルのポリタンクと合わせても、精々が五リットルしか無かったのだが、それも残す所は十リットルを切っている。

「ソフィア、水、飲め。です」

恭平はコップにまた冷えた水を注ぐと、今度はソフィアへと差し出した。

「いえ……私はまだ……」

「水、飲み。です」

遠慮をして受け取らないソフィアに、恭平は半ば強引に押し付けた。

ソフィアは日頃から何でも自分で抱え込み、人の施しを遠慮する傾向が強い。夫がいらない分は自分が頑張らねばと考えているのだろう。だが、この場合は遠慮をされて後々倒れられた方が、結果としては迷惑になる。

それが解っている為に、最近では恭平もソフィアに遠慮をしなくなつた。

恭平はソフィアがちゃんと飲むのを見届けてから、スチール製のコップを受け取った。また注いで、今度はレティシアに差し出す。

「レティシア」

「ありがとうございます。頂こう……ふう、美味しいな……」

ソフィアと違って、レティシアは遠慮をせずに受け取ると水を喉に流し込む。

レティシアは元騎士らしく、こういう理に叶った行動の場合は遠慮せずに受け取ってくれる。

遠慮をすることはしない。恩を受ければ返す。施しただけならば受けないが、自分には自分の役割があるとちゃんと理解しているのだ。

「村まで足りるか？」

コップを返す際に、ボソリとレティシアは恭平に聞き取れるように、ゆっくりと問い掛ける。

その言葉を恭平は自分の中で反芻して、意味を理解すると口を開いた。

「足りないない。悪い。時間。私、家、出す。です」

レティシアも聞き取り難いだろうが、恭平にとってはこれが今の言語の限界なのだ。

それを理解しているレティシアは、ふむ。と頷くと何かを考え出した。

明日の夜に到着予定だが、あくまでも予定である。今日はまだ持つが、明日になると更に水を節約する羽目になるだろう。そうならば体力的に進む速度が遅くなる。

それは明日の夜までに到着しなければ、最終手段で家を出す羽目になるという事だ。

夜にでも人目がない場所で家を出せばいいのではないかと、恭平は思ったのだが、家の出現する際の光は夜の方が目立つ。

それに夜だからといって、人通りが途絶えないのが問題だ。交易街と王都を結ぶ街道だけあって、夜でも商家の早馬が走っていたりする。それらの可能性を考えれば迂闊な事も出来そうに無い。いわば昼であろうが夜であろうが、家を出すという事は人目にくくつかないかの賭けなのだ。

「ソフィア殿、今日はここで野営致しましょう」

レティシアは考えて込んでいた顔を上げて、決意したように口を開いた。

「今からですか？ でも、まだ陽はあんなに高く……」

目深に被ったフードの頭を少し上げて空を見上げる。

丁度、太陽は真上を射したばかりだ。

「いえ、今は幌で影を作って休んだ方がいい。これほどの暑さは予想していませんでした。これは私の失態です。もう水も残り少なくこのまま動くとも効率が悪過ぎる。それならば今のうちに休み。夜にでも移動した方がいいでしょう」

「そう言われるのであれば、わかりました……」

「シガ殿もそれでよろしいな？」

「私、良い。です」

レティシアは街道から逸れて、近場にあつた焚き火の跡の場所まで来ると、背中の荷物を下ろした。恭平から借りたアルミポールを慣れた様子で伸ばして、そこに幌を引っ掛けて日陰を作り出す。

本来は雨除けに使う幌だが、こうすれば簡易の陽射し避けが作れる。

そこに足元の覚束ないソフィアとシルヴィアを座らせて、水を惜しまずに飲ませた。

まだ歩き続けるのならば愚策だが、夜までに体力を回復させておかないといけないのだ。一番体力のないシルヴィアとソフィアを休ませる事を最優先にする。

恭平は森の中で拾っておいた木の棒を支柱代わりにして、フードマント脱いだ。それを引っ掛けて、小さな自分専用の簡易テントを作る。

辛うじて三人が入れる程度の簡易テントの中に、大柄な恭平が入れるようなスペースは無い。

それですら少しはみ出る辺り、恭平は始めて自分の大きな体を恨らむ。

マントの下に着ていた汗で濡れて、表面には汗塩が浮いたタンクトップを脱ぐ。恭平がグツと絞るとボタボタと蛇口から水が出るように、汗が絞りだされた。

絞ったタンクトップを肩に引っ掛けると日陰の効果と相まって、

漸く涼むことができた。ソフィア達に裸を見られるが、趣味の登山で人に裸を見せる事には何の躊躇いもない。

(レティシアさん。ナイス判断)

そのまま、涼しさをより感じる為に、目を閉ざして肌に意識を回しつつも、心の中でレティシアを褒め称える。

恭平としても夜に行動した方がいいのではないかと思っていたのだが、夜の行動は意外な危険が潜んでいた。

夜に走る早馬の存在である。

稀にしか走らないとはいえ、二日に一回の頻度で通るらしい。夜に街道を歩くと早馬に跳ねられる恐れを考慮せずにはいられない。

夜に走る早馬の恐ろしいところは、走る馬の馬蹄が平原で反響をあまりせず、遠くからは聞こえないということにある。

街道とはいえ、夜ともなれば視界が利かないために、必然的に街道の真ん中を歩かざる負えない。そこで後ろとも前からともわからぬ馬蹄だけが聞こえた場合、どこに身をかわせばよいのかわからなくなる。

ゆえに火節の暑さが厳しいだろうと判っていながら、夜間に行動する選択を避けたのだ。

早馬は文字通り出来る限りの速度で走り、途中の村で馬を代えながら、殆ど止まらずに走り続ける連絡員を指す。

ただでさえ、視界の悪い夜道に走っている馬だ。人が歩いているのに気付いていた時には、跳ね飛ばした後だろう。

(精神的には疲れるだろうけど、やっぱり昼間に行動するよりマシだろ。体力に余裕のある俺とレティシアさんが気を付けていれば大丈夫なんだから……とにかく、今は……)

そこまで考えた所で、恭平の意識は闇に落ちてゆく。

暑さに参っていたのは、恭平も同じだったのだ。一時的に得られた涼に眠気が襲い、知らぬ間に意識を刈り取られていた。

一流の商人

世界が、揺れる。

夢が現かわからないままに、恭平が目を開けると空は陽が傾き始めて赤く染まり初めていた。

恭平が目を開いたと同時に、世界が揺れるのが止まった。揺れていたのは世界ではなく、恭平の体。それも、レティシアが肩を掴み揺すっていたのだ。

「起きた。出発、出来る？ です」

「いや違う。よく聞かれよ」

レティシアは首を横に振ると、耳を手を当てて周囲を探る。

すると、微かにゴトゴトと、硬いもの同士がぶつかる様な音が聞こえてきた。

「なに、音、聞こえる。です」

「馬車の音だ。それもバネを殆ど使っていない荷馬車だな……ソフィア殿達を起してくる。シガ殿も……」

その言葉に恭平は頷き返すと、慌てて肩に掛けっぱなしだったタンクトップを着込んだ。陽避けにしておいたフードマントで身を包む。

そして、皮を被せて偽装してあるリュックから熊避けスプレーを取り出して、いつでも使えるようにレッグポーチへと忍ばせた。

視界の端では、ソフィア達も起されて緊張した面持ちで荷物を纏めていた。

その間も、硬いもの同士がぶつかる音は大きくなっていき……恭平にもそれは車輪が地面を転がる音だと認識できた。馬車の音に比例して、鼓動も大きく脈打ってゆく。

（頼むから……そのまま行ってくれよ……）

しかし恭平の祈りも虚しく、馬車が進む音がいきなり途絶えた。最悪なことに、それは最も音が大きく聞こえた場所だ。

恭平とソフィア達はフードを深く被り、俯いて顔を見えないようにする。

音が止まってから暫くすると、街道の方から土と草を踏む人の足音が聞こえてきた。

「珍しいですな。この匂火節に旅人さんに出会えるとは……巡礼者さんで？」

声に抑揚をつけた特徴的な話し方で、男が近寄ってきた。

（くそっ！ 話しかけてくんじゃねーよ！）

「……みたいな者だな。貴殿は見たところ行商人の方かな？」

レティシアが男に答える。

恭平は満足に話す事が出来ないし、ソフィア達は無駄に正体がばれる事を避けるべき。この中で男の相手になれるのは、レティシア以外いないのだ。

もちろん、無視する事は出来ただろうが、下手に無視をすれば探られかねない。

「ふゝむふむふむ。あっしの見た所、巡礼者さん達の親子に貴女が

護衛つて所ですな？」

「だから……？」

「ちよ……まつ！ 剣呑な雰囲気振りまかんで下さいよう。あつしの名前はストラド。行商人をしておりやして、つい人を観察しまつ癖があるんです。気を悪くしたんなら謝りますからあ！ ね？ あつしは弱い商人なんですから……苛めないでくださいよう……」

男の無遠慮な視線と言葉に、レティシアは腰に吊るされたマシエツトの柄を握った。

それを見て男も及び腰になり、手を振って誤解を解こうと必死になる。

恭平は地面に視線を向けながら、フードからチラリと見えた男の慌てる姿を見る。どこことなく不思議な雰囲気を感ぜさせる男だと思つた。

年は二十代半ばだろうか？ 薄い布製のシャツに皮のベスト、茶色いズボンを履いている。それ以外の特徴は見受けられないが、動作に伴う雰囲気妙な不思議さをもし出していた。

わざと滑稽にしているのか。手をバタバタと大げさに振りながら、地面へと腰をへたらせて後退りする様はまるで……劇場で役者を見ているかのような気分させる。

しかし演技とは思えない焦り方や、腰の抜かし方など、演技なのか素の状態なのかいまいち掴み辛い。何より、憎めなく感じてしまつのがなんとも厭らしかった。

「お近づきの印に、酒なんぞ如何です？ 食事も奢りますから、あつしの失礼を許してくださいよ！ ね！？」

商人の男　ストラドが地面を這いずるように、レティシアとの間合いを詰めた。腰の後ろから皮袋を取り出して、赤ん坊の頭ほど

ある葡萄酒の水袋と食材らしき物を取り出してゆく。

「い……いや。殺気立って、こちらこそ済まなかった。酒と食事は結構です。我々も直ぐ発ちますゆえ……」

「まあまあ、そういわず付き合ってくださいよう。折角こうしてご縁があつたのに、独りでの食事なんて味気無い事この上ない。それに、そちらに非があると申されるのでしたら……ねえ？」

ストラドはレティシアに向かって、執拗に食事を勧めてきた。

レティシアとしても、ここで一般人相手に……しかも、商人を相手に揉める訳にもいかずどうしたものか迷う。

「それにこれから出発だとすると、子供さん連れでは危ないですよ？ それともお急ぎで？」

「……急いではないが、水が足りなくなってきたのだ。それで夜に移動する事にしたただけだが？」

「もう……ちよつとした好奇心じゃないですかあ。そう機嫌を悪くなさらないでくださいよ。商人と言うのは、話好き聞き好きな人種でございますからねえ……物でも食ってないと、口が回って回って……最後にや馬にまで呆れられちまう始末ですよあ。ははっ！」

そして、ストラドは自分が来た道を振り返り、馬車の荷台後部に繋がれた馬に『なあ？』と問い掛ける。すると芸でも仕込んでいるかの如く、馬が絶妙のタイミングでブルルと鳴いてみせた。

「商人は“沈黙が金”と聞いたが？」

「それは馬鹿な商人でしょう？ あつしとしちゃあ、そんな事を言う奴は三流もいとこですね。一流所は“聞くはタダ、話すは万金”と申しまして。まあ、師匠さんの受け売りなんですが……信用を得るにも情報を得るためにも、話し下手にや出来ない事ですね？」

レティシアは肩を竦めて、苦々しく顔を顰める。

やはり商人だけあって口では二枚も三枚も、ストラドが上手だった。余りの饒舌ぶりを前に、レティシアは強引にでも出発するかと思い始める。

「美人さんがそんな顔をしちゃ、いけません。そんな顔を向けられた日には、財布を落とすしちまったような気分になりますからやめてくださいな」と……！」

足元で這い蹲ってたストラドが急に立ち上がり、素早く腕を伸ばす。その動作見るなり素早く身体を構えたレティシアの鼻先には、小さな花が突きつけられていた。

油断していた所に急激な変化を受けては、いかに訓練を受けている者だとしても対処が遅れてしまう。レティシアはただ呆然と、目の前に出された花を見つめる事しか出来なかった。

「な、なっ！」

「そうそう。人生は驚きと喜びを感じた者勝ちでございます。ささ、お嬢さんもこちらへどうぞ！ 水が足りぬと申されるならば……、いいですよ。あっしの分をお分けしましょう。もちろん、お食事を一緒にしてくださいさるお礼ですので、お金はいただきません」

いきなりの事で無礼だが、レティシアはマシエットを抜くに抜けなかった。

まさか商人に花を差し出されたから切った、などと言える筈もない。それに、商人如きに騎士である自分が遅れを取ってしまったなど思いたくもなかった。

見る限り、商人の顔に悪意は窺えない。細い目をさらに細め、柔和な笑みを浮かべているのだから、レティシアの毒気はとうに抜か

れてしまっていた。

「さあさあ、飯にいたしましょう！ 酒を飲んで酔ってしまえば、ここでの出会いも夢の中、朝には忘れちまいますから。奥様も旦那様も、小さいお子さんもフードなんぞという無粋なものもお取りになって、食事に酒に、話に華を咲かせましょう」

ストラドは口を止めずに素早く慣れた手付きで袋から食事の材料を次々と取り出し、地面に並べてゆく。

レイシアが話すだけ無駄だと、大きく溜息を吐く。陽射し避けの幌を畳もうと立ち上がったのを、ストラドの言葉が止めた。

「一流の商人は決して売ってはならない物があるというのご存知ですか？」

ストラドの謎掛けめいた言葉を聞いて、レイシアの足が止まる。興味を引かれたのではない。声色は先程までとはうって変わって、抑揚が全く感じられない。悪く言うと、冷たい声音をしていたのだ。それと滲み出る微かな殺気に、レイシアは足を止めざる得なかった。

「……いや……」

「人の命と信用だけは売らないのが一流でしてね？ それを売っちゃったら……あつしは商人じゃなくなっちゃう……。だって、あつしは何よりも話好きの聞き好きですからねえ？」

商人は言葉の最後を元通りの、愛嬌のある抑揚をつけて話を終える。

ストラドは暗にこういったのだ。“命のやり取りはしないし、母娘を突き出したりもしない”と。放った言葉こそ違えど、レイシ

アには確かにその様な意味合いに聞こえた。

脳裏に、マシエットを抜き放ち　　後ろで火を焚いている男を斬りつける事を想像する。

だが、その考えは捨てざる得なかった。ここで殺せるか殺せないかではない。殺せても直ぐにバレるし、相手は何もしていない商人だ。

先程、花を突きつけられた時の挙動が、もし完全なる自分の油断ではなかったとしたら……あの時は油断したせいだと思っていたが、レティシアとて魔の森を越えられる程にまで腕には自信があったのだ。これは決して過信では無い、確固たるものだ。

認めたくはなかったが、レティシアは認めるしかない。

ストラドは意識の隙間を突いて、攻撃できるほど強い者だと……

レティシアは嫌な汗を掻きながら、男の前へと腰を据える。

恭平は成り行きも話も殆ど把握できないむず痒さを感じて、レティシアの顔を窺う。続いて眉根を寄せたまま、ストラドを静かに見つめていた。

そして……。あからさまに警戒するレティシアと、一方的に、ストラドの旅話を聞くとという奇妙で疲れる晚餐が始った。レティシアは毒物を警戒していたが、その心配は杞憂に終わる事になる。

翌朝、日が昇ると同時に全員が起きると、ストラドの姿は消えていた。

真っ先に気付いたのはレティシアで、続いて恭平とソフィアが辺りを見回し彼の姿を確認する。だが姿はおろか、荷馬車の姿ですら見当たらない。

彼が寝ていた筈の場所には、大きな水袋と手紙だけが残されてい

るだけだった。

手紙の封を切り、レティシアが読み上げる。

恭平達一行の中で文字の読み書きができるのは、レティシアだけだったからだ。

「なに、描かれてる？ 不審、商人、ストラド。です」

「……いや、なにも心配はいらない……ああ、別れの挨拶みたいなものだ」

言葉ではそう言うものの、レティシアの顔は顰められて全身からは力が抜けかかっていた。

その手紙には、こう書かれていたのだった。

『雛鳥の巣立ちを心配する親鳥の心は、雛鳥に届かず。親鳥は聖樹の巣下で呼び鳴き叫ぶ。

親鳥はキツネを遠ざけた。雛鳥が帰ってこれるように、雛鳥が無事なように……

これが伝言です。あつしには意味がわかりませんが、これはあつしの“時間”を買われたお客さんからのもんです。では、また会うこともありませんが、どうかお達者で』

表情の変化を気遣って恭平が声を掛けてくるが、レティシアは何も返す言葉が見つからない。

文字を読む人間はこの中で唯一人だというのに、湧き上がる感情を堪えきれず……レティシアは黙って、その手紙を握り潰すのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4763x/>

玄関あけたら二秒で異世界

2011年11月1日07時20分発行